一八七〇年代およびそれ以後の恐慌についての
マルクス、エンゲルスの見解（二）

三宅義夫

五

シュピートホフはその論文「恐慌」(A. Spiethoff : Krisen, Handwörterbuch der Staatswissenschaften, Bd. 4, 1923) のなかで、「過去一世紀を概観すると、循環 (Kreislauf) はただにそのなかにまったく一定したリズムをもっているばかりでなく、この循環それ自体がもっと大きなリズムの一環である、ということがわかる」として、つぎのように記している。「一八二二年から一九一三年にいたる時期は、四つの、鋭く目立つ循環期 (Wechselspannen) に分かれている。一八二二―一八四二年、これは不景気の年 (Stockungsjahre) の優勢によって特徴づけられている（不景気の年十二、好景気の年 (Aufschwungsjahre) 九）。[1] 一八四三―一八七三年、これは好景気の年の優勢によって特徴づけられている（好景気の年二十一、不景気の年十）。一八七四―一八九四年、これは不景気の年の優勢によって特徴づけられている（不景気の年十五、好景気の年六〔この年数はドイツの状態で算えられたものである〕）。一八九五―

一九一三年、これは好景気の年によって特徴づけられている（好景気の年十五、不景気の年四）。かくて、不景気年が優勢な時期と好景気年が優勢な時期とは交互に現われ、好景気期と不景気期との循環（ein Kreislauf von Aufschwugs- und Stockungsspannen）が過去一世紀を支配していた、ということがわかる」（„Krisen"-Artikel の復刻版たる A. Spiethoff : Die wirtschaftlichen Wechsellagen, I, 1955, S. 83—4,〔 〕内—三宅）。シュピートホフとしてはこうした「大きなリズム（großer Rhysmus）」の存在を一般化して見ようとしているのであるが、そういうことの当否は別として、本稿でとり上げているマルクス、エンゲルスの記述は一八七三年一月から一八九四年十月にいたるものであり、右の第三の時期である「不景気の年の優勢によって特徴づけられている」「一八七四—一八九四年」に当っている。そして、いまとくに注意さるべきことは、以下でとり上げるエンゲルスの記述が一八九四年で、つまり一八九五—六年からはじまった景気昂揚の前で終っていること、そのあとにいうところの「好景気の年の優勢によって特徴づけられる」時期がつづいているのであるが、エンゲルスはこれを見ることなくして一八九五年八月に死去していることである。マルクスはリカァドについて、「リカァドが著述家として活動した時代は、一般に、世界貨幣としての貴金属の機能を観察するには、あまり適しない時代であった」（『経済学批判』、インスティトゥート版、S. 178）といっているが、これにある意味では似たことが、エンゲルスがこの間恐慌、産業循環を観察していた時期についてもいいうるであろう。

（1）シュピートホフは、典型的な循環の諸段階を低下（Niedergang）、第一の上昇（erster Anstieg）、第二の上昇（zweiter Anstieg）、昂揚（Hochschwung）、資本不足（Kapitalmangel）の五段階に分け、その第一段階と第二段階、つまり低下と第一の上昇とを「不景気（Stockung）」とし、第三段階—第五段階を「好景気（Aufschwung）」としている。そして右の五つの段

階をそれぞれ Wechselstufe と呼び、これと区別して右の不景気、好景気、これに恐慌を加えて、この三つをそれぞれ Wechsellage と呼んでいる（a. a. O. S. 80—1）。上の「不景気の年」、「好景気の年」といっている「不景気」「好景気」とはこういう規定の下に使われているのである。そしてこれら Wechsellagen のいくつかを包括するものとして上のように Wechselspanne という語が用いられているわけである。なお附言しておくと、シュピートホフにあっては恐慌は「規則的な循環の外にある」ものであって、「必然的なものではなく、回避されうる」と見られている（a. a. O. S. 82）。

以下、これまで見てきたマルクスの記述にひきつづいて、エンゲルスの記述を——ここでもこれまでのようになるべく書かれた年月の順序を追って——見てゆくこととする。マルクスが恐慌について記述しているもっとも最後のものは一八八一年二月十九日付の手紙であったが、一八七〇年代およびそれ以後の恐慌について（ならびにこの時期に恐慌について）エンゲルスが遺している記述は、丁度年月の上からこれにつづいている。まず、一八八二年一月二十五日付ベルンシュタイン宛の手紙のなかでエンゲルスはつぎのように述べている。——「恐慌が政治的変革におけるもっとも強力な槓杆の一つであることは、すでに『共産党宣言』のなかにもあり、『新ライン新聞』のレヴュー（Revue）[2]でも一八四八年をも含めて詳論されています。それとともに、繁栄の回復は革命を挫折させて、反動の勝利を基礎づけるということも。そのさい、詳細な論証には、あるいはより局地的なあるいはより特殊的な性質のものである中間恐慌（Zwischenkrisen, die teilweise mehr lokaler, teilweise mehr spezieller Natur sind）をも顧慮しなければなりません。このような、純粋な取引所思惑（Börsenschwindel）に帰せられる中間恐慌を、われわれは目下経験しています。一八四七年まではそれは規則的な中間項（regelmäßige Mittelglieder）でした。したがって私の『労働者階級の状態』では、循環はまだ五年ごととして現われています」[3]（die Briefe von Friedrich Engels an Eduard Bernstein, herausgegeben von E. Bernstein, 1925, S. 53, 改造社全集版訳、第二十三巻、二七八—九ページ、

Briefe über „Das Kapital," S. 269—70, 岡崎訳、下巻、三一五ページ、傍点—三宅）。

（2）これは、さきに一八四七年恐慌について見たさい掲げておいたところのマルクスおよびエンゲルス執筆の「評論(Revue)五月—十月（Mai bis Oktober）」（ロンドンで一八五〇年十一月に出された Neue Rheinische Zeitung 第五、六合併号 Revue 欄所載）を指しているものである。この論文の一部は Kleine ökonomische Schriften, Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1955 に収められているが、全文はこのロンドンで出した『新ライン新聞』（月刊誌）の合冊復刻版、Berlin, 1955 で見ることができる。（筆者稿「マルクス信用論の一解明——一八四七年恐慌を通じて見た『資本論』第三部第五篇の諸叙述の現実的関連性——」、未来社刊『貨幣信用論研究』、二一四ページ、二二三—四ページ参照）。

（3）後掲の『イギリスにおける労働者階級の状態』ドイツ語一八九二年版への序言を見られたい。

見られるようにエンゲルスは一八八二年一月に、「目下」イギリスでは「中間恐慌」が生じているとし、一八四七年までの循環においてはこうした「中間恐慌」は「規則的な中間項」であったとして、「中間恐慌」なるものを打ち出している。エンゲルスはこの「中間恐慌」ということを以下いくつかの記述においてもくり返し述べているのであって、「中間恐慌」論はエンゲルスの恐慌についての見解の一特徴をなしているといいうる。以下しばらくこの「中間恐慌」について見ることとなるが、その前に、かんたんに一八七八—九年恐慌以後のイギリスの状況につい見ておこう。

E・ヴァルガ監修『世界経済恐慌史（一八四八—一九三五年）』（一九三七年、永住道雄訳、第二冊（第一巻第二部）、慶応書房、昭和十三年刊による）はつぎのように記している。——「一八七八年の恐慌につづいて、一八七九年末から、ふたたび持続的なものではなかったが恢復がはじめられた。……一八八〇—一八八一年には、基本的な工業的指標の生産の増大と、微弱なものではあるが、物価の若干の昂騰が見られた。しかしながら、恢復そのものは、きわめて短

かいものであった。一八八二年にはあたらしい恐慌が勃発した。この恐慌は、工業的生産および商業のいちじるしい縮少をもたらした。それはきわめて長びいた性質をおびていた。重要指標によれば、低落は一八八六年までづっとひきつづいた。例えば、銑鉄生産高は、一八八二年から一八八六年までに一八・四％低下したし、棉花消費高〔棉花輸入高〕は一八八二年から一八八六年にかけて一九・七％、造船業のごときは、一八八三年から一八八六年までに六二・八％という巨大な低下をひき起こした〔船舶建造トン数〕。鋼鉄生産高のごときは、イギリス工業史上はじめて、この恐慌において一五・九％の低下を示した。機械輸出高は一八八三年から一八八六年にかけて二五・四％低落した〔これらの数字はいずれも「恐慌直前の最高点から最低点への変動」の数字である〕」（永住訳、一三五―六ページ、傍点および〔　〕内―三宅）[4]。

（4）これにつづいて「八十年代にイギリスに深刻な停滞を条件づけたところの具体的諸要因」を挙げているが、これについては同書の他の箇所で、「この時期〔七十年代と八十年代〕におけるイギリスの恐慌の発展における特殊性の基礎をなすものは本質上つぎのごとき諸要因である」として記しているところの方が、より明確である。この点についていま見ることはすこし先廻ることになるのであるが、ここに引いておこう。――「(1)一八七三―一八九七年の時期における長期にわたる農業恐慌と長期にわたる物価の下落、(2)アメリカ、ドイツ、およびその他のヨーロッパ諸国における工業のいちじるしい増大の結果ひき起こされた、世界市場における未曽有の規模に達する過剰生産、(3)イギリスの工業的独占がその競争相手アメリカ合衆国とドイツとによって崩れ出したこと」（同上訳、九七―八ページ）。

当時における右の「物価の下落」についてはいろいろ問題のあるところであるが、同書が掲げている物価指数を拾ってみると、一八六六年一二〇・〇、これが一八七〇年に一一二・九となり、そこから上昇して一八七三年には**一三〇・六**となっているが、以後つぎのような動きを示している。一八七四年一二〇・〇、七五年一一二・九、七六年一一一・八、七七年一一〇・六、七八年一〇二・四、七九年**九七・六**、八〇年**一〇三・五**、八一年一〇〇・〇、八二年九八・八、八三年九六・五、八四年

八九・四、八五年八四・七、八六年八一・二、八七年**八〇・〇**、八八年**八二・四**、八九年八四・七、九〇年八四・七、九一年**八四・七**、九二年**八〇・〇**、九三年八〇・〇、九四年七四・一、九五年七二・九、九六年**七一・八**、九七年**七二・九**、九八年七五・三、九九年八〇・〇、一九〇〇年八三・二。なおその後は一九〇一年八二・四、〇二年八一・二、〇三年八一・二、〇四年八二・四、〇五年八四・七、〇六年九〇・六、〇七年九四・一、〇八年八五・九、〇九年八七・一、一〇年九一・八、一一年九四・一、一二年一〇〇・〇、一三年一〇〇・〇（同上訳、一〇〇ページ、一三八ページ、一八〇ページ、二二二ページ、二七二ページ、三二六ページ。なおこの指数はザウエルベック-ステイティスト卸売物価総指数、これは四十五種商品別物価の算術平均指数であって、一八六七―七七年＝一〇〇をソヴィエト世界経済研究所において一九一三年一〇〇に換算、同上訳、四七六ページ参照）。見られるように一八七三年から長期にわたる物価下落がはじまり、八〇年に微騰しているが、すぐにふたたび下落に向い、八七年の八〇・〇まで継続的に下げ、九〇年代では九六年には七一・八まで下がり、そこからやっと反騰に転じている。当時の産業循環にはこうした物価の長期にわたるいちじるしい下落が絡みついていたのである。なお本誌前号五ページ所載のスコットランド銑鉄の価格のグラフを参照されたい。

また前掲のシュピートホフは「一八七四―一八九四年」の「不景気期（Stockungsspanne）」をつぎのように区分けしている。「一八七四―七九年の不景気」、「一八八〇―八二年の好景気」、「一八八三―八七年の不景気」、「一八八八―九〇年の好景気」、「一八九一―九四年の不景気」と（a. a. O. S. 123―30）。

ところで、エンゲルスがさきの一八八二年一月二十五日付の手紙で「目下」の「中間恐慌」を「純粋な取引所思惑に帰せられる」ものといっているのは、どういうことを指しているのであろうか。前号の註（12）で「イングランド銀行がこの一八七八年十月に六％を唱えたのち、つぎにふたたびこの高さまで公定歩合を引上げたのは、一八八二年一月三十日であった。同年二月はじめパリのユニオン・ジェネラル（Union générale）が支払停止をするにいたったが、『金および外国為替の上にそれが反射してくることに対抗して、イングランド銀行はふたたび、予防的に六％を

唱えることによって自己を防衛した』(Clapham: The Economic History of Modern Britain, vol. II, p 384)」と記しておいた。フランスは普仏戦争による敗戦後停滞状態をつづけていたが、一八七〇年代末にいたりこれから立直っていちじるしい昂揚を示してきた。そしてこの昂揚を熱狂にまでもっていったものがユニオン・ジェネラルにおける株式投機であった。シュピートホフの前掲書は、「〔一八八〇―八二年の好景気において〕ヨーロッパではただフランスだけに過度投機が生じた、――あたかもこの国はこれまでの遅れをとり戻そうとしたかのように。銑鉄生産は一八七九年から一八八三年にいたる間にほとんど五〇%増大した。過度投機の波は主として一人の人から発した。……十八世紀にローがミシシッピイ会社を、また一八五〇年代にペレール兄弟がクレディ・モビリエを一つの国民経済組織プランを実施するために設立したのと同様に、ボントー(Bontoux)はユニオン・ジェネラルをパリに政治的意図をもって創設した」とし、「有価証券取引所恐慌は一八八二年にリヨン、パリ、ウィーンの取引所で起きた。フランスでの金融市場の狼狽はきわめて大きく、ためにイングランド銀行は――以前の同様な操作に報いて――二度金を現送して救援しなければならなかったほどであった」と記している(a. a. O. S. 126)。エンゲルスが「純粋な取引所思惑に帰せられる中間恐慌」といっているこの「取引所思惑」というのは、おそらく、こうした事態に着目していっていたのであろう、と思われる。

六

さて、エンゲルスが打ち出している「中間恐慌(Zwischenkrise)」という規定であるが、さきに見たようにこれ

は、「あるいはより局地的なあるいはより特殊的な性質のものである」と。「一般恐慌」とこういう点で区別されると見ているのであろう。「一八四七年」まではこの「中間恐慌」は「規則的な中間項」であったとしていることについてはのちにややくわしく見るが、さし当りこのように「中間項」といっていることから見ても「一般的恐慌」と「一般的恐慌」との「中間」に生じるという意味で「中間恐慌」という語が使われていることがわかるであろう。

この一八八二年一月二十五日付ベルンシュタイン宛の手紙に日付から見てつづいて、同じく一八八二年十二月二十二日付ベーベル宛の手紙のなかで、エンゲルスはさらにつぎのように述べている。――「アメリカにおける恐慌は、当地の恐慌や、まだまだかならずしもいたるところで取除かれるにはいたっていないドイツ産業の不況（Druck）と同じように、けっして本当の恐慌（richtige Krise）ではなくて、前の恐慌からの過剰生産の事後作用（Nachwirkung）だと私には思われます。ドイツでの崩壊（Krach）は前回は、十億投機（Milliardenschwindel）[5]によって早められたのであって、当地とアメリカとでは、それ〔崩壊〕は正常な時期たる一八七七年にやってきました。だが、一八七一年から一八七七年までのように、一繁栄期間にこんなに生産力が高まったことはかつてないことでした。だから、一八三七年から一八四二年までに似て、当地とドイツとでは主要産業部門、とくに木綿と鉄とに慢性的不況（chronischer Druck）があるのです。諸市場は相変わらずすべての生産物を消化することができない。アメリカの産業は、大体において相変わらず、保護されている国内市場を相手に操業しているのだから、そこでは、生産が急速に増加すると局地的な中間恐慌（lokale Zwischenkrise）がごく容易に生じうるのです。だがこの中間恐慌は結局、アメリカが輸出能力あるものとなってイギリスの脅威的な競争相手として世界市場に立ち現われるまでの期間を、短縮するのに役立つだけです。だから私は、――そしてマルクスも同じ見解ですが[6]――、現実の恐慌（wirkliche Krise）が本当の到

来期（richtige Verfallzeit）よりもずっと前にやってくるだろうとは、信じないのです」（August Bebel : Aus meinem Leben, dritter Teil, 1914, S. 242—3, 1953, S. 213, 改造社全集版訳、第二十一巻、二五六—七ページ、傍点—三宅）。

（5）既述のように、一八七〇年の普仏戦争の結果ドイツはフランスから多額の賠償金を手に入れ、これを契機としてはげしい企業熱が起きた。Milliardenschwindel といっている所以。

（6）マルクスが死去したのは一八八三年三月であるから、このときにはまだ存命していたわけである。

見られるようにここでエンゲルスは当時の事態を「前の恐慌からの過剰生産の事後作用」だとし、「本当の恐慌」、「現実の恐慌」と区別されるべきものであるとしている。ところでまずこの「前の恐慌」の時期であるが、これは前号で見たように、ドイツおよびアメリカでは一八七三年に起き、マルクスも一八七九年四月に、「合衆国、南アメリカ、ドイツ、オーストリア、等々におけるすさまじい、そしてもうすでに五年も続いているような恐慌」といっている。イギリスでは一八七三年にはそれほどはげしく揺られず、その代わり一八七八—九年が一八七五年から辿った下降線の底をなした。したがってエンゲルスが、ドイツでは「早められた」が、イギリスとアメリカとでは「正常な時期たる一八七七年に」やってきたといっているのは——エンゲルスはこのほかたとえば『反デューリング』のなかでも「目下（一八七七年）六度目〔の恐慌〕を経験している」と記しているのであって[7]、この「一八七七年」というのはエンゲルスとしてはここでたまたま誤ってそう記したのではないであろうと見受けられる——、やや不審に思われる。また、このように「一八七七年」とすると、その前の恐慌一八六六年から数えて約十年目ということになり、したがって「正常な時期」に恐慌がきたといいうることになるのであるが、しかし、前号で見たように、当時のマルクスの記述から見ると、マルクスはこの時の恐慌が従来と同じようにして「正常な時期」にやってきたとは見ていなかった、

と見受けられる。むしろ一八七五年頃には――あとにはこう見ることを変えたのではなかろうかと思われるが――、「一般的恐慌の週期」が「短縮」したというようにも述べていたのである。しかしともかくエンゲルスは、「前の恐慌」は「正常な時期たる一八七七年に」やってきた、つぎの「現実の恐慌」の「本当の到来期」――これをエンゲルスはつぎの手紙に見られるようにこれまでと同じく約十年目と見ている――にはまだいたっていない、そしてこの一八八二年の事態は「前の恐慌からの過剰生産の事後作用」だ、あるいはさきの手紙のように「中間恐慌」だ、という見方をしていたわけである。

「前の恐慌の過剰生産からの事後作用」という見方は、このほかたとえば『資本論』第三部（一八九四年刊）第五篇のなかでの書入れでエンゲルスは「一八三七年の恐慌―これは長い後陣痛をともない、一八四二年にはもう一度完全な後産的恐慌(Nachkrise)が生じた――」と述べている（インスティトゥート版、Bd. III, S. 600）。右で「一八三七年から一八四二年までに似て」いるといっているのと同じであって、一八三七年の恐慌、それが一八四二年の「後産的恐慌」を伴ったこと、この過程と「一八七七年」の恐慌、それといまの一八八二年、こういった対比がなされているわけである。

(7) ここで、一八七八年刊の『オイゲン・デューリング氏の科学の変革』（『反デューリング』）のなかのつぎの箇所を掲げておく。これは恐慌についてのいわば通り一遍の説明であって、とくに一八七〇年代に書かれたという特殊な意義をもっているものではない。そういうものとしては、ただおわりの方で上記のように「目下（一八七七年）」六度目の恐慌を経験していると記しているところがあるだけである。なおこの書はその後何回か版をあらたにし、またこの部分は『空想から科学へ』にも収められているが、ここはいずれもこのままで変えられていない。「実際、最初の一般的恐慌が勃発した一八二五年以来、商工業世界の全体、つまり全文明諸国民と多かれすくなかれ未開なその従属諸国民との生産と交換とは、ほとんど十年に一度は

めちゃめちゃになっている。交易は停滞し、市場はあふれ、生産物は山積して売れず、現金は姿を消し、信用は消滅し、工場は休業し、労働大衆はかれらが生活手段をあまりに多く生産したために生活手段に不足し、破産に破産がつづき、競売に競売がつづく。この停滞が数年つづき、生産諸力や生産物が大量に浪費され破壊されて、結局、山と積まれた商品が多かれすくなかれ減価してさばけ出し、生産と交換とが徐々にふたたび動き出す。その歩調はだんだんと速くなって速足となり、この産業上の速足は駆足に移り、そしてそれはさらに足を速めてついに産業上、商業上、信用上、投機上の完全な障害物競争での手綱なしの疾駆となり、そして最後には危険きわまる跳躍ののちまたもや到達するのは——恐慌の壕の中へである。そしていつもくり返してこうなのである。このことをわれわれは、一八二五年以来まる五たび経験した〔一八二五年、一八三七年、一八四七年、一八五七年、一八六六年の五回の恐慌〕。そして目下、(一八七七年)六度目を経験している。これらの恐慌の性格はきわめてはっきりしているので、フーリエが最初の恐慌を crise pléthorique つまり過剰からきた恐慌と名づけたのは、これら恐慌のすべてに適中した言葉である」(F. Engels : Herren Eugen Dührings Umwälzung der Wissenschaft Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1953, S. 340—1, 大月『選集』訳、第十四巻下、四六七ページ、傍点および〔 〕内—三宅)。(なお前号二ページに「エンゲルスの記述は、一八七三年五月が一つ入るが、それ以外は一八八二年一月から一八九四年十月にいたるまでであって」とある「一八七三年五月」は「一八七八年」の誤記であって、この『反デューリング』のこの箇所を指していたものであった。)

つぎは、同じくベーベル宛の右から約半年のちの一八八三年五月十日付の手紙。ここでエンゲルスはつぎのように述べている。——「事業状態についてのあなたの見解は、イギリス、フランス、アメリカで確証されます。これは一つの中間恐慌で、一八四一年から一八四二年までのそれと同様なものですが、しかしずっとより大規模です。十年ごとの循環というのは、大体、はじめて一八四七年以来(カリフォルニアおよびオーストラリアの金生産およびしたがって世界市場が完全につくり出されたこと(vollständige Herstellung des Weltmarkt)のために)よりはっきりと発展していきたものです。今日、アメリカ、フランス、ドイツがイギリスの世界市場独占を打ち破りはじめており、したが

って過剰生産が一八四七年以前のようにふたたびより急速に生じ（sich geltend zu machen）はじめているのであって、こうした今日では、五年ごとの中間恐慌もまた、ふたたび現われてくるのです。資本制生産様式が完全に疲労しつくした証拠（Beweis der vollständigen Erschöpfung）です。繁栄期はもはや十分に発展するにいたらない。五年後にはもう、ふたたび過剰生産となるでしょうし、またこの五年の間でさえ、概して景気は振わないのです。だがこのことはけっして、一八八四年―一八八七年が、ふたたび、一八四四年―一八四七年のようなごく昂揚した事業期（eine ganz flotte Geschäftszeit）にならないということを証明するものではありません。しかし、ついで本崩壊（Hauptkrach）がくるのはまったくたしかです」（A. Bebel : a. a. O. 1914, S. 253―4, 1953, S. 221―2, 改造社全集版訳、第二十一巻、二六二―三ページ、傍点―三宅）。

ここでもさきと同様に、一八三七年恐慌後の事態と対比されている。「一八四一年から一八四二年までのそれと同様」といっているのは、さきの「一八三七年から一八四二年までに似て」というのとちがったことをいっているのではなく、さきに見たように一八三七年恐慌ののち、長い後陣痛がつづいて一八四二年に「後産的恐慌」が生じたというその中間恐慌を、ここで一八四一―四二年といっているわけである。そして一八三七年に恐慌、一八四一―二年に中間恐慌、一八四四―七年に繁栄、一八四七年に恐慌、といった一八三七年から四七年にいたる過程と対比して、一八七七年に恐慌、現在の一八八二―三年に中間恐慌、したがって一八八四―七年に「ごく昂揚した事業期」が来ないとはかぎらない、くるかもしれないとし、「しかし」その様相はともかくとしてそのつぎには一八四七年恐慌のような恐慌――「本崩壊」――がくるのは「まったくたしか」だ、と見ているのである。ここで「本崩壊」といっているのは、さきの手紙で述べていた「本当の恐慌」、「現実の恐慌」と同じものであることはいうまでもない。

ところで、なぜ、このように当時の事態を一八三七年―一八四七年の過程と対比しているかというと、今日の「世界市場」の状態は「一八四七年以来」の状態とはちがっており、「一八四七年以前のように」すぐに「過剰生産」になりやすい、と見ているからである。「十年ごとの循環」は「大体、はじめて一八四七年以来よりはっきりと発展してきたもの」であるとし、「一八四七年以前」と「一八四七年以来」との間に一つの線を引き、そして「今日」のところで――「一八四七年以来」との境はこれまでの記述では「一八七七年」――いま一つ線を引いて、「ふたたび」事情が変化したと見ることは、以下エンゲルスの記述を貫いている根本見解の一つをなしているものである。

はじめの一八八二年一月二十五日付の手紙でも「一八四七年までは」中間恐慌が「規則的な中間項」であったといっていたが、このように一八四七年以前には（一八二五年以後についてのことであるが）「五年ごとの中間恐慌」、したがって「循環」は「五年ごと」という形をとっていた、――といっても前掲の『反デューリング』のなかでも記しているように、一八二五年以来十年ごとの「一般的恐慌」がくり返され、そうした大きな循環としては「十年」の循環があったことを打消しているわけではない――。これにたいして一八四七年以後にはこのような「中間恐慌」は見られなくなった、したがって「循環」は「十年ごと」という形を「よりはっきり」とるようになった、と見ているのである。そして「今日」においては「ふたたび」「中間恐慌」――この第三段階の場合の事態を「中間恐慌」と見るかどうかはあとではすこし変わってきていると見受けられる――が生じるようになったのだ、と。

ではなぜ、一八四七年以前および今日では「過剰生産」にすぐなりやすく、一八四七年以後には十年目にしか生じなかったか。エンゲルスはさきには現在「慢性的不況」が生じているのは恐慌前の繁栄期に「生産力」が非常に増大し、ために恐慌後においても「市場」が生産物をひきつづき消化できないでいるとしていたが、右の一八八三年五月

の手紙では「イギリスの世界市場独占」が打破されはじめてきたので「過剰生産」が「より急速に」生じはじめているといっている。この説明は、一方は生産の増大に、他方は市場の制限に重点が置かれているというちがいがあり、かならずしも同じとはいいがたいが、ともかく要するに、生産にたいして市場が相対的に狭くなってきた、といっているわけである。一八四七年以前にもこのようであったが、一八四七年以後には大量の「金生産」がありまた「世界市場が完全につくり出された」ために、市場が従来よりも拡大され、したがって「過剰生産」も十年に一度ということになった、と。ここで問題がいずれも「世界市場」との関連において考察されていること、循環の仕方の変化が「世界市場」の変化と結びつけていわれていることは、当然のことであるが、注意さるべきである。

なお、右の一八八三年五月十日付のエンゲルスの手紙は“Aus meinem Leben”第三部末の「発行者のあとがき」のなかに掲げられているのであるが、そこで発行者K・カウツキーはつぎのように述べている。――「このあと、状況は、エンゲルスが一八八三年に予期したよりもなお一そう悪化した。『昂揚した事業期』は一八八四年には来なかった。それはやっと一八八七年にやって来たが、一八九〇年にはすでにまたもや終ってしまった。繁栄のあたらしい時代（neue Ära）、資本制生産様式が『完全に疲労しつくした』のちにおけるそれのあらたな蘇生（Aufleben）、慢性的過剰生産の当分の間の克服、こういったものを見るまでエンゲルスはもはや生きていなかったのである」（a. a. O. 1914, S. 254, 1953, S.222.）。エンゲルスは一八四〇年代と対比して、一八四七年恐慌に先立った一八四四―七年のように一八八四―七年にも「ごく昂揚した事業期」がくるかもしれないと見ていたが、現実の経過はこのようであったと記しているものである。つけ加えていうと、したがって、エンゲルスが「くるのはまったくたしかです」といっていた「本崩壊」も、さきの「一八七七年」から約十年目の「本当の到来期」には生じなかった。カウツキーが右

で、一八八七年にやってきたが一八九〇年にはすでにまたもや終ってしまったといっている昂揚期は、前掲シュピートホフが「一八八八―九〇年の好景気」としているのに該当するものである。またカウツキーが、「資本制生産様式が『完全に疲労しつくした』のちにおけるそれのあらたな蘇生」といっているのは、エンゲルスの言葉にたいしていかにも皮肉であるが、ここで「繁栄のあたらしい時代」としているのは、一八九五―六年からはじまった昂揚を指しているのであろう。(五)のはじめて掲げておいたように、シュピートホフは「一八七四―一八九四年」の「不景気期」について、「一八九五―一九一三年」を「好景気の年の優勢によって特徴づけられる」ところの「好景気期」としているが、こうした時期に入っていった。そして前記のように、エンゲルスはその前、一八九五年八月に死去したのでこれを見ることができなかったのである。[8)]

(8) エンゲルスは右のように一八八二―三年当時、当時の事態を中間恐慌ないし「事後作用」的なものと見ているのであるが、前掲のヴァルガ監修『世界経済恐慌史』では「循環別区分は世界経済恐慌の開始された年によって行った」(傍点原文のもの)として、「一八七三年、一八八二年、一八九〇年」を挙げており(「第二部への序文」、前掲永住訳、第二冊、三ページ)、またエルスナーの『経済恐慌』でも「一八八二年の恐慌はその本質からすれば、先行の諸恐慌と同じように一つの一般的な過剰生産恐慌であった」と規定している(F. Oelßner: Die Wirtschaftskrisen, Bd. I. 1953, S. 272, 千葉秀雄訳、三二一ページ)。だが、一八七三年に起きた恐慌は、さきのマルクスの記述にも見られるように、諸国で――ひとりイギリスにおいてばかりでなく――数年間続いたのであって、一八八〇―一年にはやや好転したとはいえ、そのあとすぐにきたこの一八八二年からの事態をつぎの「一般的恐慌」と見ることは――この一八八二年からの経済活動低下の大きさは既述のようにけっして小さなものではなく、従来の諸恐慌にひけをとらないものであったが――、妥当かどうか一つの問題であると思われる。一八八二年からの事態を一つの中間恐慌と見ると、一八八八―九〇年の一応の立直り、ついで生じた一八九〇年からの恐慌、ここまでを一つの産業循環と見、つぎにあらたな循環がはじまっていったと見ることになる。

七

前記のように一八八二年から一八八六年まで経済活動の低下が続き、上昇に転じたのはやっと八七―八年であった。つぎに掲げるエンゲルスの記述は、しばらく、さきの三つの手紙と同様にいずれもこの上昇に転じる前のものであって、前掲のように一八八三年五月頃にはまだ一八八四年あたりからは昂揚期になるかもしれないと見ていたがそれもやってこなく、次第にエンゲルスの記述においても、これをどう解するかという点でやや混迷しているのではないかと思われる形跡が窺われる。

第一、――さきの一八八三年五月の手紙から約半年のちの、一八八四年一月十八日付同じくベーベル宛の手紙（K. Marx and F. Engels on Britain, Moscow, 1953, p. 517. したがって英訳）。「十年ごとの循環は、一八七〇年以来アメリカならびにドイツの競争が世界市場におけるイギリスの独占に終りをもたらしつつある現在にあっては、破れ去ってしまったように見えます（seem to have been broken down）。産業の諸主要部門において事業不況が当地でもアメリカでも拡がっており、あたらしい恐慌――これはイギリスでは繁栄期によって先行されていません――の瀬戸際にあります」（傍点―三宅）。

第二、――『哲学の貧困』のドイツ語訳書に附されたエンゲルスの「序言」。これは右から約九ヵ月のちの同じく一八八四年十月二十五日の日付で書かれている（Das Elend der Philosophie, Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1952, S. 34―5, 山村喬訳、岩波文庫、二一九―二〇ページ）。

エンゲルスはそこでロードベルトゥスを批判しつつ、「商品生産が世界市場的拡がりをとるやいなや、私的計算にしたがって生産している個々の生産者たちと、これら生産者たちがそこに向けて生産しているところの、かれらにはその需要の質および量が多かれすくなかれ知られていない市場との間の均衡は、世界市場の暴風雨たる商業恐慌によって達せられるのである。世界市場がどういう状況にあるかを物価の騰落によって生産者たちに知らせることを、競争にたいして禁じるならば、かれらをまったく盲目にすることになる」云々と述べているのであるが、右の「商業恐慌によって達せられるのである」という句のところに註を附してつぎのように記している。――「すくなくともすこし前まではこういうふうであった。イギリスの世界市場独占が、ますます、フランス、ドイツ、ことにアメリカの世界貿易への参加によって打ち破られて以来、一つのあたらしい均衡形態が生じているように見える。(scheint eine neue Ausgleichungsform sich geltend zu machen)。恐慌に先立つ一般的繁栄の時期は、これまでのようにはやってこないであろう。それがまったくこないならば、わずかばかりの動揺を伴う慢性的沈滞(chronische Stagnation, mit nur geringen Schwankungen)が近代的産業の正常な状態となるにちがいないであろう」(傍点―三宅)。

ここでは、「一般的繁栄」期がやってこない、それがやってこない原因はイギリスの「世界市場独占」がアメリカ、ドイツ、フランスの競争によって打ち破られたからであるとしているばかりでなく、この「一般的繁栄」期が「まったく」こないならば、これまでのような「恐慌」を伴う循環に代わって、「わずかばかりの動揺を伴う慢性的沈滞」が常態となるであろう、という注目すべき発言がなされている。一般的「恐慌」は一般的「繁栄」といわば裏腹の関係にあるからである。しかしこの見方と並んで、あとで見るように、慢性的不況のまま大きな恐慌に突入するであろうといった見方もなされている。なお、事態を「中間恐慌」と見ることはこの一八八四年あたりからすこし変わってき

ているように感じられ、注意をひく。

第三、――右とほとんど相隔たない約半月ほどのちの一八八四年十一月八日付カウツキー宛の手紙（岡崎次郎訳『エンゲルスのカウツキーへの手紙』、岩波文庫、一三五―六ページ。ちなみにこの岡崎訳の底本は Karl Kautsky : Aus der Frühzeit des Marxismus, Engels' Briefwechsel mit Kautsky, Prag, 1935）。「イギリスおよびフランスでは、大工業への移行はほぼ完成されている。プロレタリアートの置かれている諸関係は、すでに安定したものとなった。農業地区と工業地区、大工業と家内工業とは分離され、そして一般に近代工業の許すかぎりでは、固定されている。十年ごとの恐慌循環を伴う変動さえも、慣例的な生存条件となっている。産業の変革期中に生じた政治的運動または直接社会主義的運動――それは未熟なものだったが――は挫折して、鼓舞よりもむしろ阻喪を後にのこした。ブルジョア的資本家的発展の方が革命的な反対圧力よりも強いことが示されたのだ。資本主義的生産にたいするあらたな反抗のためには、あらたな、より強力な原動力を必要とする。たとえば、これまでの世界市場支配からのイギリスの退位とか、あるいはフランスにおける特殊な革命的な機会とか」（傍点―三宅）。イギリスとフランスではこうであるが、これに反して一八四八年以後のドイツにおける資本主義の発達には期待が持てる云々といっているのである。

エンゲルスの手紙として最初に掲げた一八八二年一月の手紙のなかでも、「恐慌が政治的変革におけるもっとも強力な槓杆の一つであることは、すでに『共産党宣言』のなかにもあり」云々と述べているように、マルクス、エンゲルスはもともと、恐慌を革命との関連において考察していた。一八四七年恐慌のさいにはこれと期を同じくして大陸において大きく革命の波が生じた。このあとを受けて一八五七年恐慌の切迫のさいには、別稿でも見るように、マルクス、エンゲルスはふたたび革命の波が高まることに大きな期待を抱いていた。右のカウツキー宛の手紙は、こ

うした恐慌と社会的変革との関係についてエンゲルスが当時どう考えていたかを窺わしめるものと見ることができるであろう。だが、右の記述から、エンゲルスは当時、資本制生産が発達するにつれて恐慌ないし不況が労働者階級の状態の悪化を通じて政治的行動へ刺戟を与えることがなくなったといっている、と見られるべきではない。たとえば前掲の一八八四年一月十八日付のベーベル宛の手紙でも「あたらしい恐慌の瀬戸際にある」とするとともに、「このことが、現在当地で社会主義運動が急に――といってもこの三年間徐々に準備されてきたのであるが――立ち現われてきたことの秘密です」云々（ibid. p. 517）、と述べている、等々、といった具合であって、むしろつねに景気変動は労働運動の消長との関連において考察されているのである。そしてさらにまた、当時のような慢性的不況の持続、イギリスが世界市場を独占していたさいに労働者階級もそれに与っていた余恵がなくなることによって、エンゲルスは、労働者階級の状態のいちじるしい悪化、失業者の増大、そしてそこから大きな政治的危機の到来を展望していたと見受けられるのであって、そのことは右のカウツキー宛の手紙の末尾でも示唆しているが、後掲の諸記述においても窺われるところである。

第四、――右からほぼ一年のちの一八八五年十月二十八日付ベーベル宛の手紙（Marx-Engels, Ausgewählte Briefe, S. 461）。（日付の順からいうと、『イギリスにおける労働者階級の状態』のドイツ語一八九二年版へのエンゲルスの「序言」のなかに再録されている一八八五年に書かれた論文「一八四五年と一八八五年のイギリス」がここに入ることになるが、これは「序言」の他の部分と切り離しがたいので、のちに掲げることとする。）「すべての決定的な産業部門での慢性的不況（chronischer Druck）が、当地でもフランス、アメリカでも、引続いて支配的です。とくに鉄と木綿において。これも資本制組織の不可避的な帰結であるとはいえ、いまだ聞いたことのない状態です。過剰生産がきわめて大規模なので、恐慌にす

らなりえない！（eine so kolossale Überproduktion, daß sie es nicht einmal zu einer Krise bringen kann!）自由に処理しうる、投下先を求めている資本がいちじるしく過剰につくり出されたので、当地では割引率は事実上、年一―1½%の間を動いており、そして双方の側で日々放出または回収される短期の前貸金（コール money on call）は、ほとんど年½%で出合いを求めています。しかし、貨幣資本家がかれの貨幣を、あたらしい産業企業に投下するよりも、こんなふうに投じる方を好んでいるということ、このことによってまさに、かれらは、全経済がかれらの眼にいかにあぶないものと映じているか、ということを告白しているわけです。そして、あたらしい投資ならびに旧来の投機にたいするこのような恐怖（Scheu）――こうしたことはすでに一八六七年の恐慌[9]のさいにも見られたところです――のなかに、なぜ急性の恐慌にいたらないか（warum man es nicht zu einer akuten Krisis bringt）ということの主要原因（Hauptgrund）があるのです。だがしかし、結局、恐慌はやってくるにちがいないでしょう。そしておそらくそれは当地の旧式の同業組合を終焉させるでしょう」云々（傍点―三宅）。

「なぜ急性の恐慌にいたらないか」ということの「主要原因」は新投資が手控えられていることにある、という指摘は重要である。これは、さきの「一般的繁栄」期が「まったく」こないならば「わずかばかりの動揺を伴う慢性的沈滞」が常態となるであろうというのと同じ考えからいわれているものであろう。

(9) この恐慌においては一八六六年五月十日に割引業者オーヴァレント・ガーニー商会が支払停止をし、翌十一日に一八四四年のイングランド銀行条例が停止された。この銀行条例の停止は一八四七年十月、一八五七年十一月の停止につぐ三度目の停止であった。そこで普通には一八六六年恐慌と呼ばれているが、このあと産業部門に大きな不況がきた（たとえば『資本論』第一部 S.704―5 参照）。エンゲルスはここで「一八六七年の恐慌」といっているほか、後掲『イギリスにおける労働者階級の状態』の序言のなかでは「一八六六年の恐慌」といい、また後掲『資本論』第三部第二分冊の註（八）S. 534 のところで

は「一八六七年の一般的恐慌」といっている。あるいはまた「一八六八年の恐慌」と呼んでいるところもある（『資本論』第三部第一分冊の註（七七）S. 423）。恐慌状態がいく年かにわたっているさい、恐慌が勃発した年を附して何年の恐慌と呼ぶか、あるいは何年から何年の恐慌と呼んだ方がよいか、一つの問題であるが――一八七〇年代以後のように過程が長びいている場合にはとくにそうである――、エンゲルスが右のように、あるいは一八六六年、あるいは一八六七年、（あるいは一八六八年）と記しているのは一八六六年に勃発した恐慌がその後産業部門において長びいたからである。

第五、――右からほぼ半月のちの一八八五年十一月十三日付ダニエルソン宛の手紙（Marx-Engels, Ausgewählte Briefe, S. 464―7. 改造社全集版訳、第二十一巻、一五八―九ページ。なお Briefe über „Das Kapital" にはこの日付の手紙は載っているがここの部分は入っていない）。「著者〔マルクスのこと〕がかれの手紙でいっている恐慌[10]は実際例外的なもの（an exceptional one）でした。事実、それはいまだに続いており、全ヨーロッパおよびアメリカが今日までそれに悩まされています。その原因の一つは、金融的崩壊（financial crash）がないということです。しかし主要な原因は、疑いもなく、世界市場の状態がまったく変化したことです。一八七〇年以来、ドイツおよびとくにアメリカが近代的産業においてイギリスの競争相手となり、他方、その他の大ていのヨーロッパ諸国は、もはやイギリスに依存しないほどに自国の製造業を発達せしめました。その結果、過剰生産の過程は、それがおもにイギリスにかぎられていた時よりもはるかに広い領域に拡がり、そして、――今日までのところ――、急性的な（acute）性質の代わりに慢性的な（chronic）性質をとることとなったのです。以前には十年ごとに空気を清めていた雷雨をこのように遅れさせていることによって、この長引いている慢性的な不況（depression）は、これまでかつて見たことのないような狂暴さと規模とをもった崩壊（a crash）を準備しているにちがいありません。そして、著者がいっている農業恐慌については一そうそうでしょう。この農業恐慌は今日にいたるまで続いており、ほとんどすべてのヨーロッパ諸国に拡がってい

ます。そして西部アメリカのプレーリ（prairies）の処女地的黒土（чернозем）が疲弊しないでいるかぎり続くにちがいありません[11]」（傍点―三宅）。

前号でマルクスの記述を見たおわりのところで、マルククスは一八八一年二月十九日付ダニエルソン宛の手紙では一八七三年以来長引いた経過を辿ったイギリスの恐慌――一八七八―九年に最低点を通過――について、「すぎ去った」ものとして述べていると見受けられるが、エンゲルスは一八八五年十一月十三日付ダニエルソン宛の手紙のなかで「それはいまだに続いており、全ヨーロッパおよびアメリカが今日までそれに悩まされています」といっている、ということを指摘しておいた。エンゲルスがこういっているのは、さきに見たように一八八二年からの恐慌を「前の恐慌からの過剰生産の事後作用」と見る見方からいわれているものかとも受けとられるが、エンゲルスは次第に、経過を循環――以前のようにほぼ十年ごとにくり返されるといったような形でないにしても――として捉えることからはなれて、終りのない過程として捉えるように傾いてきているのであって（あとになるとまたすこし変わるが）、これはそうした見方につながっているとも見受けられるのである。だんだん「慢性的不況」一色として見るようになってきている、――これは、「中間恐慌」と見ていたさいには多かれすくなかれつぎに昂揚がくることが予期されていたのであるが、この昂揚がなかなかこないばかりでなく事態は悪化をつづけた、ということからきているものであるが。ところでさきにも一寸記しておいたが、右に見られるように、こうした「慢性的不況」が「これまでかつて見たことのないような狂暴さと規模とをもった崩壊」にいたると考えられているのであるが、これについてはなおあとを見てゆこう。

（10）ダニエルソンはかれがマルクスから受取った手紙をエンゲルスのもとに送ることを申しいで、こうした通信の公刊に役立

たせようとした。上のエンゲルスの手紙はこのマルクスの手紙の抜書が送られてきたことにたいする返書である。（なおこれらの手紙を送付しようというダニエルソンからの申出については一八八五年二月十一日付ダニエルソン宛のエンゲルスの手紙参照）。上に引用したすこし前のところでエンゲルスは、「著者〔マルクス〕の一八七九年から一八八一年にいたる手紙からの抜書にたいして厚く御礼申上げます」と述べている。だが既掲マンデルバウム編の Die Briefe von Karl Marx und Friedrich Engels an Danielson, 1929 には一八六八年以来のマルクスの手紙が収められている。右の御礼にひきつづいて、エンゲルスは、前号の註（11）に記しておいたように、一八七九年四月十日付ダニエルソン宛の手紙でマルクスが『資本論』続巻刊行遅延の弁明をしていることにたいして述べている。

（11）『資本論』第三部（一八九四年刊）第六篇のなかでエンゲルスはこの点についてつぎのようにややくわしく述べている。――「大洋横断汽船や、南北アメリカおよびインドの鉄道は、まったく独自の諸地域を、ヨーロッパの穀物市場で競争すべき位置にもちこんだ。一方には北アメリカのプレーリ（Prärien）、アルゼンチンのパンパス（Pampas）というような、自然そのものによって犂のために開墾された大草原が、原始的耕作により肥料なしにでも数年間にわたって豊富な収穫をもたらした処女地が、あった。また他方には、ロシアやインドの共産制的諸共同体の、すなわち国家の無慈悲な専制政治によって――しばしば責苦によって――強制された租税用の貨幣をえるために生産物の一部分、しかもたえず増大する一部分を売らねばならなかった諸共同体の、地所があった。これらの生産物は、生産費にはお構いなしに、取扱業者が申出る価格で売られた。けだし農民は、支払期限までに絶対に貨幣を得なければならなかったからである。そしてこの競争――処女地たる大草原地の競争、ならびに租税の締木にかけられて倒れつつあるロシアやインドの農民の競争――を受けては、ヨーロッパの借地農業者や農民は旧来の地代のもとではやってゆけなかった。ヨーロッパにおける土地の一部分は、穀物耕作用としては決定的に競争圏外に出て、地代はいたるところで減少し、われわれの第二例の変例Ⅱ――価格が低落しかつ追加的諸投資の生産性が減少する場合――がヨーロッパにとっての常則となったのであって、スコットランドからイタリーにいたる、またフランスから東プロイセンにいたる地主的苦難（Agrarierjammer）はここに由来する。幸いにしてまだまだ、すべての大草原地が耕作されているわけではない。まだ大草原地は、ヨーロッパの大土地所有の全部を、そのうえに小土地所有をも、破滅させるに足るだけ残存している」（インスティトゥート版、Bd. III, S. 774―5, 長谷部訳、青木版一〇二三―四ページ）。

第六、――右からほぼ二ヵ月のちの一八八六年一月二十―二十三日付ベーベル宛の手紙。（K. Marx and F. Engels on

Britain, p. 519, したがって英訳）。「六週間前までは、当地では、商売が良い方向に向う徴候が現われつつあるといわれていました。だが今日ではこういう話はふたびすっかり影を消してしまった。窮迫(distress) は以前よりもはなはだしく、さきの見込みが立たないことが異常にきびしいこの冬を一そうきびしくしています。このように過剰生産が市場を圧迫しているのは、今日すでに八年目です。しかも次第に良くなる代わりに、ますます悪くなる一方です。もうこうなっては、状況が以前とは本質的に (essentially) 変化したのだということは、疑いありません。イギリスが世界市場で大きな競争相手をもつことになって以来、従来知られていた意味での恐慌の週期は閉ざされています (the period of crisis……has been closed)。もし恐慌が急性的でなく慢性的となり、かつそれと同時に強度においてはなにものも失わないとすれば、その結果はどういうことになるだろうか？ (what will be the outcome?) 繁栄の時期 (a period of prosperity) は――たとえ短いものであっても――、積上げられた商品が吸収されてしまった時には、時折、ともかく戻ってくるにちがいない。しかし、私は、全事態がどうなってゆくかを見たいと切に思っています。けれども、つぎの二つのことはたしかです。第一には、われわれは旧社会の存立にとって十年ごとの恐慌の時期(the period of decennial crisis) よりも比較にならぬくらいもっと危険な時期 (a period incomparably more dangerous) に入ったのだということ。そして第二には、繁栄が戻ってきても、イギリスは、以前ひとりで世界市場からクリームを掬い取っていた時にくらべて、繁栄よって影響を受けることはずっとすくないであろうということ、です」（傍点―三宅）。

第七、――右から半月ほどのちの一八八六年二月八日付ダニエルソン宛の手紙 (Die Briefe von K. Marxund F Engels an Danielson, herausgegeben von K. Mandelbaum, S. 40. 改造社全集版訳、第二十一巻、一六一ページ。したがって

ドイツ語訳)。「当時では産業恐慌は良くなるよりも悪くなりつつあります。そして人々は、イギリスの工業独占は終りだということを次第に認めてきています。アメリカ、フランスおよびドイツが競争相手として世界市場に現われているので、また高い関税が外国商品を他の新興工業諸国の市場から遠ざけているので、事態はかんたんな算術の問題です。独占的地位にある一つの大工業国が十年ごとに一つの恐慌をもたらしたとするならば、かかる国が四つあるさいにはどうなるか？　ほぼ、四分の十年ごとに一つの恐慌、すなわちしたがって、実際には終りなしの恐慌 (praktisch eine Krise ohne Ende)。それでまちがいありません (Uns kanns recht sein)」(傍点原文のもの)。

一般的恐慌が多かれすくなかれ世界恐慌として生じることを考えると、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツの四つで十年を割って「四分の十年ごとに一つの恐慌」というように「かんたんな算術の問題」とすることには、大いに疑問がある。しかし、このように「終りなしの恐慌」、いわば永遠恐慌説といったことをエンゲルスがいっているについては、それが、「八年」にもわたって――これは一八七八―九年の恐慌から数えていることになるが、このように一八八〇―一年に微弱ながら持直したことを度外視すれば　一八七三年以来十三年間ともいえる――「過剰生産が市場を圧迫している」というまったく異常な事象、こういう異常な事象にはじめてぶつかって、その渦中において記されたものである、ということが考慮されねばならないであろう。またイギリスでの経済活動の低下は既述のように一八八二年から八六年までつづき、この八六年が底であった。こうしたことも与ってか、エンゲルスの考え方の方もこの一八八六年には深刻さの度合がいちじるしくなっている。

第八、――これは右からは約九ヵ月のち、一八八六年の終りに近い十一月五日付の『資本論』第一巻英語版へのエンゲルスの「序言」(カア Kerr 版 1921, vol. I, pp. 31―2, インスティトゥート版, Bd. I, S. 27―8, 長谷部訳, 青木版九八―九

ページ）。「生産の、したがってまた市場の、たえざるかつ急速な拡大なしには不可能なこの国〔イギリス〕の産業体制の運行は、まったく止まりつつある（The working of……is coming to a dead stop）。自由貿易はもはや百計尽きてしまった。マンチェスターさえも、この、自分の従来の経済的福音を疑っている〔ここにエンゲルスは、本日の午後開かれたマンチェスター商業会議所の四半期会議において自由貿易の問題について盛んな討論が行われた、一つの決議案が「他の諸国民がイギリスの自由貿易の先例に従うことを四十年間も待ったが駄目だったので、本会議所は、いまや、この立場を再考する時期が到来したものと考える」という趣旨で、提出された、この決議案はただ一票の差で否決された、云々ということを一八八六年十一月一日付の『イヴニング・スタンダード』紙から引用して註記している〕。急速に発達しつつある外国産業は、どこにおいても、――関税で保護された諸市場においてばかりでなく、中立の諸市場においても、また海峡のこちら側においてさえも、イギリスの生産を脅かしている。生産力は幾何級数的に増大するのに、諸市場の拡張はたかだか算術級数的にしか進まない。一八二五年から一八六七年までたえずくり返した十年ごとの沈滞、繁栄、過剰生産、恐慌という循環は、なるほど、もうおしまいとなったように見える、――ただし、ただわれわれを永続的、慢性的不況（a permanent and chronic depression）という絶望の沼地に入らせるために。あこがれの繁栄期はやって来ないであろう。その先ぶれの徴候が認められるかと見えるたびに、そのたびごとにそれはまたもや泡と消える。その間に、まい冬ごとに、『失業者をどうするか』という大問題がくり返して起きてくる。だが、失業者の数は年々膨脹しているのに、この問題を解く人はだれもいない。そしてわれわれは、失業者たちが辛棒できなくなり、かれら自身の運命をかれら自身の手に収めるべき刹那を、ほぼ計算することができる。たしかに、かかる刹那において、一人の人の言葉が傾聴されねばならない、――その一人の人の全理論は、イギリスの経済史および経済状態にかんする生涯にわたる研究の結果た

るものであり、そしてその人はその研究によって、すくなくともヨーロッパではイギリスは、不可避的な社会革命が平和的合法的な手段によって完全にその目的を果たしうるであろう唯一の国だという結論に達していた。もちろんかれは、つぎのことをつけ加えるのをけっして忘れなかった、――イギリスの支配階級が『奴隷制を支持する叛乱（pro-slavery rebellion）』なしにこの平和的合法的な革命に服従することはほとんど期待されない[12]、と」（傍点―三宅）。

ここでもさきの「終りなしの恐慌」と同様に、「永続的、慢性的不況」といっている。

（12）インスティトゥート版ではこの、イギリスでは社会革命が「平和的合法的な手段」によって目的を達しうるというマルクスの見解について註を附し、レーニンが『国家と革命』のなかで、「いまや、第一次大帝国主義戦争の時代たる一九一七年においては、マルクスによるこの制限は停止されるのであると」述べている文章を引用している。この註記が適切であるかどうかについてはやや問題がある、と考えられる。

八

つぎに、『イギリスにおける労働者階級の状態』のドイツ語一八九二年版に附されているエンゲルスの「序言」のなかの記述を見ることとする。ここでの記述はこれまで見てきたものにくらべてかなり詳細であって、とくに、さきに述べていたところの「一八四七年以前」と「一八四七年以来」との間における状況の変化についてのエンゲルスの見解のほぼ全貌を知ることができる。そしてさきと同様に、現在においてはこの状況がさらに変化したとして、世界市場におけるイギリスの「工業上の独占」が打ち破られたことを挙げているのである。

なお、このドイツ語一八九二年版の「序言」の日付は一八九二年七月二十一日付であって、いままで掲げた最後の

『資本論』第一巻英語版への「序言」が書かれた一八八六年十一月五日から六年近くの年月を経ている。しかしこのドイツ語一八九二年版の「序言」は、アメリカ版に附された一八八六年二月二十五日付の「附録」とほとんど同じものであり、[13] したがって以下で見るエンゲルスの記述は、はじめに書かれた年月日をとるならば一八八六年二月二十五日付ということになる。――しかもそのうち大部分はここに再録されている一八八五年の論文である――。つまりさきの『資本論』第一巻英語版への「序言」よりも約八ヵ月前に書かれていることになる。

(13) エンゲルスはドイツ語一八九二年版への「序言」のはじめにつぎのように記している。「一八八五年にニューヨークでこの本の英語訳（フローレンス・ケリー・ウィシュネウェツキー夫人 Frau Florence Kelley Wischnewetzky による）が現われ、この訳は一八九二年にロンドンでスウォン・ゾンネンシャイン商会（Swan Sonnenschein & Co.）から再刊された。アメリカ版への序文（Vorrede）がイギリス版へのそれの基礎となり、イギリス版のそれがまたこのドイツ版序言（Vorwort）の基礎となっている」（F. Engels : Die Lage der arbeitenden Klasse in England, Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1952, S. 13, 大月書店刊『マルクス・エンゲルス選集』補巻2、四八一ページ）。これはエンゲルス自身によって書かれた文章であるが、若干訂正的補足を加えておくと、右アメリカ版にはエンゲルスの手になる一八八七年一月二十六日付の序言（Preface）――アメリカの労働運動を論じたもの――と一八八六年二月二十五日付の「附録（Appendix）」とが付されていたが、その後のイギリス版（一八九二年）への序言（Preface）、ドイツ語版への序言（Vorwort）の「基礎」となったのはこの「附録」の方であった（イギリス版への序言ではこのことをはっきり断わっている）。また上の「一八八五年」というのはウィシュネウェツキー夫人によって英語訳された年のようであるが（イギリス版への序言）、その英語訳が「現われた（erschien）」のは、つまり刊行されたのは、このアメリカ版への序言の日付からも見られるように「一八八五年」ではなく、――上記 Bücherei des Marxismus-Leninismus 版扉裏の刊行者記によっても、また既掲の K. Marx and F. Engels on Britain, p. 1 の編集者記によっても――一八八七年であった。なお、大月書店刊『選集』の訳では、ドイツ語一八九二年版への「序言」の訳のなかに、これとアメリカ版への附録およびイギリス版への序言と相異している箇所が註記されており、これら三者間の異

同を見る上に便利である。また右 K. Marx and F. Engels on Britain のなかにはアメリカ版への「序言」およびイギリス版への序言が収められている。本稿での訳はドイツ語一八九二年版への「序言」によっている。

エンゲルスはこのドイツ語一八九二年版への「序言」のなかでつぎのように述べている、――「本書の本文では、大産業恐慌の循環期間は五年ごとと述べられている。これは、一八二五年から一八四二年にいたる出来事の推移から明らかに（scheinbar）結論された年月規定であった〔この『イギリスにおける労働者階級の状態』がはじめて出版されたのは一八四五年であった〕。しかし、一八四二年から一八六八年にいたる産業の歴史は、現実の週期は十年であること、中間恐慌（Zwischenkrise）は第二次的性質のものであったのであり、一八四二年以来はしだいに消滅してきたことを明らかに示した。一八六八年からは、事態はさらにまた変化してきた」（F. Engels : Die Lage der arbeitenden Klasse in England, Bücherei des Marxismus-Leninismus, 1952, S. 19, 改造社全集版訳――河西太一郎・東井金平・荘原達共訳――、第五巻、一八ページ、大月書店刊『選集』訳、補巻2、四九三ページ、〔 〕内―三宅）。

そして、「このことについてはさらにあとで見よう」として、一八八五年三月一日付の『ロンドン・コモンウィール（London Commonweal）』に英語で、また『ノイエ・ツァイト（Neue Zeit）』の同年六月号（第六冊）にドイツ語で発表した一論文[14]を再録している。そしてそこでエンゲルスはいまから「四十年前」にイギリスは経済的にも政治的にも「危機」に直面していたこと、しかし一八四七年の恐慌、大陸における一八四八年の革命ののち、産業資本家の政治的支配が確立し、また自由貿易が発展し、イギリスは「世界の工場」として飛躍的な発達を遂げたことを述べたのち（ここの記述は註（15）に掲げておく）、つぎのようにいっている。――「しかし、そのあと一つの転換（eine Wendung）がやってきた。一八六六年の恐慌につづいて、事実、一八七三年頃には短いかつ軽微な事業昂揚が現わ

れはしたが、しかしそれは続かなかった。われわれは、当然来たるべき時に（zu der Zeit, wo sie fällig war）、すなわち一八七七年または一八七六年には、事実なんら十分な恐慌（volle Krisis）を経験しなかったが、しかし一八七六年以来、あらゆる支配的な産業部門は慢性的停滞状態（Versumpfungszustand）にある。完全な崩壊（vollständiger Zusammenbruch）も、久しく待ちこがれられている事業繁栄期――崩壊（Krach）の前後にはかならず来るべきものとわれわれが信じていたところの――も、こようとしない。極端な不況（tödlicher Druck）、あらゆる事業にとってすべての市場の慢性的な過充、これが、ほとんど十年近く以来〔というのは一八八五年の論文であるから。一八七六―八五年〕われわれの経験している状態である。この原因はどこから来ているのか?」（a. a. O. S. 25, 改造社全集版訳、二三ページ、大月『選集』訳、五〇一ページ、傍点および〔　〕内―三宅）。

ここで、「われわれは、当然来たるべき時に、すなわち一八七七年または一八七六年には、事実なんら十分な恐慌を経験しなかった」と述べているについては、前に見たように一八八二年十二月二十二日付の手紙では「当地とアメリカとでは、それ（崩壊）は正常な時期たる一八七七年にやってきました」と述べていたことが想起される。そしてこれとかんれんして、右で「一八六八年からは、事態はさらに変化してきた」といっているように、一八六六年恐慌以後「転換」が生じてきたと観察されているのである。

（14）この論文名はドイツ語版には記されていないが、イギリス版への序言のなかでは英語での表題を“England in 1845 and 1885”と記している（前記の On Britain, p. 23）。とするとこの論文は、『資本論』のインスティトゥート版第三巻の「編集まえがき」のなかで同版巻末の「附録」に収めるとわざわざ註記していて（Bd. III, S. 8*）、どういうわけか「附録」に収められていないところの論文，England 1845 und 1885”であるということになる。なお、右「編集まえがき」ではこの論文についてつぎのように述べている。説くところの当否はともかくとして、参考としてここに引用しておこう、――「『資本論』

書上げ後二、三十年間におけるイギリスの労働者階級の状態を一八八五年に書いた叙述であって、マルクスによって発見された資本制蓄積の一般的法則を完全に確証すると同時に、また、イギリス（ここでは工業独占の結果として、帝国主義段階の個々の現象がすでに前世紀の最後の三分の一期に発達した）を例として、諸事実――これは同様にレーニンの帝国主義分析に採入れられている――、すなわち、プロレタリアートの分裂、広汎なプロレタリア大衆の一そうの窮乏化の下での労働者貴族の成立、をつきとめている」(Bd. III, S. 8*)。

ついでエンゲルスは「この原因」について述べているのであるが、それを見るに先立って、順序としてこの「序言」のもっと前の方で一八四七年恐慌以降のイギリスにおける資本制生産の発達についてつぎのように特徴づけていることを見ておこう。――「一八四七年の恐慌後における事業の復活は、あたらしい産業時代(Epoche)の黎明であった。穀物条例の廃止（一八四六年）と、そこから必然的に生じてきた爾余の財政的諸改革〔イギリス版―financial reforms〕とは、イギリスの商工業にとって、その望んでいたあらゆる自由活動の余地をつくり出した。[15] すぐそのあとに、カリフォルニアとオーストラリアの採金地の発見がつづいた。[16] 植民地諸市場はイギリスの工業生産物にたいするその吸収能力をますます高めていった。[17] ランカシャーの力織機は幾百万のインドの手織工を決定的に葬り去った。シナはますます門戸を開かれた。しかしとりわけてアメリカの発達は、巨歩をもって進むこの国にとってさえ未曽有の速さであった。そして、忘れてならないことだが、当時アメリカはまさに一個の植民地市場――しかもすべての植民地市場のうち最大な――にすぎなかった。すなわち、原料生産物を供給して工業生産物を外国から――この場合にはイギリスから――輸入する国であった。／ところで、こうしたことになおつぎのようなことがつけ加わった。すなわち、前時代(vorige Periode)の末に採用されたあらたな交通手段――鉄道および大洋汽船――が、いまや国際的規模で実施され、かくて、それまではただ素質上(der Anlage nach)存在していたにすぎなかったところの世界

市場を事実上つくり出した（tatsächlich herstellten）、ということである。この世界市場は、当時はまだ、一大工業中心地たるイギリスを中心として、これをめぐる一連の、主としてあるいはもっぱら農業を営む諸国からなりたっていた。イギリスはこれら諸国の過剰な原料生産物の最大部分を消費し、その代わりにこれらの諸国にその需要する工業製品の最大部分を供給した。したがって、イギリスの工業の進歩が巨大な未曽有のものであって、その程度たるや、一八四四年の状態などは〔ここで一八四四年といっているのは、『労働者階級の状態』を書いていた時を指しているものであろう〕こんにちのわれわれには較らべてみるととるにたりない、まるで原始的なものと思われるほどである、ということはすこしも不思議ではない」（a. a. O. S. 14—5, 改造社全集版訳、一四ページ、大月『選集』訳、四八三—五ページ、傍点および〔　〕内—三宅）。

（15）この「序言」のなかの前記一八八五年の論文「一八四五年と一八八五年のイギリス」のなかでエンゲルスはこれの国内的過程——経済的政治的——をつぎのように述べている。やや長くなるが一八四〇年代の「危機」、その後の資本制的発展についてのエンゲルスの見解をたしかめておくことは、それがふたたび行きづまりにいたったとしている第三段階の情勢についてのエンゲルスの見解をより明らかに知る手がかりを持つこととなりうるので、すこしくわしく見ておくこととする。「〔いまから〕四十年前にはイギリスは、どう見ても強力（Gewalt）によってしか解決されないような一つの危機に直面していた（stand vor einer Krisis）。工業の巨大かつ急速な発達は、外国市場の拡張、および需要の増加をはるかに凌駕してしまっていた。十年ごとに生産の進行は一般的な商業恐慌によって強力的に中断された。すなわち生産の進行は、長期間にわたる慢性的な不況（Abspannung, イギリス版—depression）ののち、わずかな短い繁栄の年がつづき、それがきまって熱病的な過剰生産と、そして結局あらたな崩壊（Zusammenbruch）とで終った。資本家階級は声高く穀物の自由貿易を要求し、飢えている都市住民をそれの出身地である農村地方におくりかえすことによって、この自由貿易の強要を威嚇した。……都市の労働者大衆は、自分たちをも政権に参加させることを——人民憲章（Volkscharte, イギリス版—People's Charter〔普通選挙権等六ヵ条を要求したもの〕）を——要求した。かれらは小ブルジョアの多数から支持された。そしてこの両者の間の差異は、この人民憲章

を強力的に実施すべきであるか、あるいは合法的にすべきであるか（gewaltsam oder gesetzlich, イギリス版—by physical or by moral force）、という点だけであった。そこに一八四七年の商業恐慌とアイルランドの飢饉とがやってき、そして、この両者とともに革命への展望がひらけた。／〔ところが〕一八四八年のフランス革命がイギリスのブルジョアジーを救った。勝利をえたフランスの労働者の社会主義的諸宣言は、イギリスの小ブルジョア階級を恐怖せしめ、また〔フランスの労働者にくらべて〕より狭くはあるが、しかしより直接に実際的な限界内で進められていたイギリス労働者の運動を解体せしめた。……労働者階級の政治的活動は後方に押しやられた。資本家階級が全線にわたって勝利をえた。／一八三一年の選挙法改正は、土地貴族〔イギリス版—landed aristocracy〕にたいする全資本家階級の勝利であった。穀物関税の廃止は、大土地所有〔イギリス版—landed aristocracy〕にたいしてばかりでなく、また、その利害が多かれすくなかれ土地所有のそれ〔イギリス版—landed interest〕と同一であるかまたはそれと結びついていたところの資本家の諸分派、すなわち銀行業者や取引所取引員や利子生活者等々（Bankiers, Börsenleute, Rentiers usw. イギリス版—bankers, stock-jobbers, fund-holders, etc）にたいする、産業資本家たちの勝利であった。自由貿易は、イギリスの国内的ならびに対外的なすべての財政上、商業上の政策〔イギリス版—commercial and financial policy〕を、産業資本家、すなわちいまや国民を代表することとなった階級の利害に合致するように改革することを意味した。そしてこの階級は真剣にこの仕事にとりかかった。工業生産のあらゆる障害は容赦なくとり除かれた。関税率および全租税制度が変革された。……イギリスは『世界の工場』になるべきであった。他のすべての国々は、イギリスにとって、アイルランドがすでにそうであったように、イギリスの工業生産物にたいする市場、そしてイギリスの原料および食糧品の仕入先になるべきであった。イギリスこそは農業的世界の偉大な工業的中心地であり、穀物と棉花とを生産する衛星国がたえずその数を増しつつこの工業的太陽のまわりをめぐることになる。なんというすばらしい展望！／……〔ここでエンゲルスは、「工場主たちは労働者階級の支持なくしては、ブルジョアジーは国民にたいする完全な社会的、政治的支配を獲得しうるものでない」ということを悟ってきて、工場法や労働組合をすすんで守り、認めるようになり、またさきのピープルス・チャーターも工場主たちの政治的綱領となって、その掲げていた普通選挙権等々の要求は逐次ほぼ法律によって施行されるようになってきたことを述べている〕……／産業資本家のこの支配がイギリスに与えた効果は、当初は驚くべきものであった。事業はふたたび活況を呈し、近代的産業のこの揺籃地においてさえ未曽有の程度に拡大した。一八五〇年から一八七〇年にいたる二十年間における生産の偉大な上昇にくらべると、また輸出入、資本家たち

の手中に累積されている富、大都市に集積されている人間労働力などの、息がつまるほど大きな数字にくらべると、以前の蒸気と機械とのすべての偉大な創造物のごときは、物の数でもなかった。進歩はもちろん、以前と同様に、十年ごとに――一八五七年ならびに一八六六年――恐慌の回帰によって中断された。しかし、こうした反動もいまでは、どうしても通過しなければならない、だが結局はまたふたたびもとどおりにおさまるところの、自然的な、不可避的な出来事と看做されるようになった」（a. a. O, S. 20―3, 改造社全集版訳、一九―二一ページ、大月『選集』訳、四九四―九ページ、〔 〕内―三宅）。

(16) 周知のようにマルクスも著書『経済学批判』の序言のなかでつぎのように記している。――「カリフォルニアおよびオーストラリアの金の発見にともなって、ブルジョア社会はあらたな発展段階に踏み込んだようにみえた」（インスティトゥート版、S. 7）。

(17) 「一八四七年恐慌」について見たさいにも掲げておいたように、『資本論』第三部（一八九四年刊）第五編のなかでエンゲルスは、一八四七年恐慌に先立った繁栄についてつぎのように記している。――「一八四二年末には、一八三七年以来ほとんど間断なくイギリスの産業を圧迫していた不況が退きはじめた。その後の二年間、イギリスの工業生産物にたいする外国の需要がますます増加した。一八四五―四六年は最高の繁栄期を示した。一八四三年にはすでに、阿片戦争がイギリスの商業のためにシナを開放していた。この新市場は、すでに旺盛をきわめた拡張――ことに綿業のそれ――に、あらたな口実を与えた。生産を高めたのと同じ熱情をもって、人々は鉄道の建設に傾注した」云々（インスティトゥート版、Bd. III, S. 444, 傍点―三宅）。上では「一八四七年の恐慌後における事業の復活は、あたらしい産業時代の黎明であった」と記しているが、あるいはまたさきのように「一八四二年から一八六八年にいたる産業の歴史は」云々と記している所以でもある。

さて前に戻って、「一八六八年から」循環期間が変化してきたこと、「一八七六年以来」「慢性的停滞状態」にあること、こうしたことの「原因はどこから来ているのか？」についてのエンゲルスの説明を見よう。右に見られるように、エンゲルスは、一八四〇年代後半以降のイギリスにおける資本制生産の発達が世界市場の状態と深い関係にあったことを挙げて、それ以前の時期とこの時期とがこの点において区別されると特徴づけているのであるが、問題の一八六〇年代後半以降のイギリスにおける産業循環変容の原因もまた、この世界市場の状態がさらにふたたび変化して

きたというところに求められ、そこから説明されているのである。（――なお、エンゲルスの論文「一八四五年と一八八五年のイギリス」自体の行論としては、さきにもしるしておいたように、まず註（15）の記述があり、そのあと前掲の「しかし、そのあと一つの転換がやってきた」と述べ、「この原因はどこから来ているのか？」として、ついで以下で見る説明がなされているのであって、内容の筋を辿る上から第一の部分を註に移し、他の箇所での記述を右に持ってきたのであるが、しかし以下の第三の部分を見るさい、右の第一の部分は併せて念頭に置かれなければならない。）

エンゲルスは「この原因はどこから来ているのか？」に答えてつぎのようにいっている。――「近代産業の条件である蒸気力と機械とは、燃料ことに石炭があるところではどこでも、これをつくり出すことができる」のであるから、イギリス以外の他の諸国においても――フランス、ベルギー、ドイツ、アメリカ等――「自国のためだけでなく、爾余の世界のためにも」工場生産がはじめられるようになった。その結果、イギリスがほとんど一世紀の間保持してきた「工業独占（Industriemonopol）」は「いまや回復しがたいまでに打破された」[18]。かくてエンゲルスは語をついでいう、「けれども、イギリスの工業独占は、現在のイギリスの社会制度の枢軸点なのである。この独占が存続していた間でさえ、市場はイギリス工業の生産能力の増大と歩調をともにすることができなかったのであって、十年ごとの恐慌はその結果たるものであった。しかるにいまや新市場は日ごとによりすくなくなる。……もしヨーロッパ大陸の商品、そしてことにアメリカの商品がいよいよ多量に流れ出てくるならば、もし世界にたいする物資の供給において今日なおイギリスの工場の手に帰している獅子の分前が年々縮小してゆくならば、その結果はどうなるであろうか？……このことを指摘するのは私が最初ではない。すでに一八八三年に、ブリティシ・アソシエイションのサウスポートでの会議において、経済部門の部長イングリス・パルグレイブ君が卒直につぎのように述べた。――高い事業利潤が

えられた時代はイギリスではすぎ去り、種々の大産業部門の発展は一つの休止に入っている。ひとは、イギリスはもはやこれ以上さきに進んでゆかない状態に移行しつつある、とほぼいうことができるであろう（The country might almost be said to be entering the non-progressive state. イギリス版より、Marx-Engels on Britain, p. 30）と」（a. a. O. S. 25—6, 改造社全集版訳、二三—四ページ、大月『選集』訳、五〇一—二ページ、傍点—三宅）。

そしてこれにつづいてエンゲルスは、当時のイギリスの経済、政治にたいしてつぎのような注意さるべき見解、展望を示している（ここも上来ひきつづいて一八八五年の論文である）。「ところで、こうしたすべてのことの結末はどうなるであろうか？　資本制生産は静止しえないのであって、成長し、拡大しなければならなく、そうでなければ死滅するほかないのである。すでに今日、世界市場への供給におけるイギリスの獅子の分前がたんに制限されていることが、停滞、貧困を、一方での資本の過剰、他方での失業労働者の過剰を、意味している。もし年々の生産の増加が完全に停止するにいたったならば、一体どうなるであろうか？　ここが資本制生産の急所、アキレスの踵なのである。資本制生産の生存条件は不断の拡大が必要であるということであるが、この不断の拡大がいまや不可能となる。資本制生産は一つの袋小路に（in eine Sackgasse）いたりつつある。年とともにイギリスはますますつぎの問題に直面する、——国民がこなごなになってしまうか、それとも資本制生産がそうなるか。この両者のうちどちらが亡びなければならないか？」（a. a. O. S. 26—7, 改造社全集版訳、二四ページ、大月『選集』訳、五〇三ページ、傍点—三宅）。だが、このすぐあとではつぎのようにいっている、——「もし現在の圧迫的な沈滞がさらに一層強まるばかりでなく、この強められた致命的な不振状態がイギリスの産業の継続的な、ノーマルな状態となるならば、〔労働者階級は〕一体どうなるであろうか[19]」と（a. a. O. S. 27, 改造社全集版訳、二四ページ、大月『選集』訳、五〇三ページ、傍点—三宅）。

(18) 「フランス、ドイツ、そしてことにアメリカが、イギリスの工業上の独占をますます打ち破るおそるべき競争者である。これらの国の工業は、イギリスの工業にくらべて幼稚であるが、しかし後者よりもはるかに大きな速度で成長しており、今日ではほぼ、イギリスの工業が一八四四年に立っていたと同じ発達段階に到達している。アメリカにかんしては、この対照はとくにいちじるしい」(a. a. O. S. 17, 改造社全集版訳、一六―七ページ、大月『選集』訳、四八八ページ、傍点―三宅)。

(19) イギリスの工業独占がつづいていた間はイギリスの労働者階級は――特権的な少数者はとくに――この独占の利益にある程度まで与っていた。そしてこれこそオーエン主義の没落以来イギリスに社会主義が存在しなかった理由である。だが工業独占の崩壊とともにイギリスの労働者階級は――特権的少数者も含めて――外国の労働者と同じ地位に下がり、そしてイギリスにふたたび社会主義が存在するようになるであろう。――エンゲルスはこういっている。

九

一八八六年には数年間にわたった経済活動の低下が底をつき、一八八八―九〇年には若干の昂揚がきた。「一八八〇―八二年の好景気」について、「かつて経験されたことがなかったほど短いものであり、かつまた同様に弱いものであった」と記しているシュピートホフは、この「一八八八―九〇年の好景気」は「前の好景気と同じく三ヵ年しか続かなかったが、いくつかの国にとっては前よりもより活況を呈した、だがもちろんその他の国々にとっては前よりも劣っていた」と記している(a. a. O. S. 125, S. 127)。「この期の資本取引においては、資本力の強いすべての国にとって外国投資がいちじるしい役割を演じた、――ポルトガル、ギリシャ、メキシコ、アルゼンチン、ヴェネズエラなどが輸入地の先頭たるものであった」(a. a. O. S. 128)。こうした海外投資においてロンドンで中心的な活動をしていたベーリング商会(Baring Brothers & Co.)がアルゼンチンの破局によって困難に陥り、イングランド銀行に救済を求め

るにいたったのは、一八九〇年十一月八日であった。――ベーリング・クライシス（Baring crisis）。このベーリング商会の破綻は一八六六年のオーヴァレンド・ガーニー商会（Overend, Gurney & Co.）の破綻に比肩するものであったが、イングランド銀行の救済とロンドンの諸銀行業者の共同保証とによって、金融市場に混乱を与えないで切抜けられた。「この熟練した処理のおかげで、金融的恐慌も、なんらのパニックも生じなかった」（J. Clapham : An Economic History of Modern Britain, vol. III, 1951, p. 8）。これにつづいて前記のように、「一八九一―九四年の不景気」が来、ついで、シュピートホフが「不景気の年の優勢によって特徴づけられている」「一八七四―一八九四年」の「不景気期」にたいして、「好景気の年の優勢によって特徴づけられている」とする「一八九五―一九一三年」の「好景気期」に入っていったわけである（なお、前にも一寸触れておいたがシュピートホフのこうした時期区分をくり返し記しているのは、たんにエンゲルスの諸記述を見る上での便宜、参考としてであって、シュピートフと同じくこうした「大きなリズム」が一般的に存在すると筆者が考えているわけではない）。

ところで、恐慌についてのエンゲルスの記述には、いままで筆者の眼に触れたかぎりでは、一八八七年、八八年、八九年、九〇年、九一年、この五ヵ年の間の日付をもつものはないようである。[20] そして、右の「一八八八―九〇年」の「好景気」について、あるいはまた一八九〇年のベーリング・クライシスについて、とくに直接述べているものは見当らない。以下掲げる諸記述はいずれも一八九二年―九四年に属する。しかし、残念なのは、前記のように「一八九五年」以後の事態を観察した記述が求めえられないことであって、右の空いている期間があることは、その後のエンゲルスの記述があるから、エンゲルスの見解を知る上には、さして大きなさしさわりとなるものではない。

（20）この五ヵ年の間の日付のものとして、つぎのようなことを述べている一八九〇年十月二十七日付コンラード・シュミット

宛の手紙がある。――「…金融市場はまたそれ特有の恐慌（seine eignen Krisen）をもちうる――ここでは直接の産業攪乱は一つの従属的な役割しか演じないか、またはぜんぜんなんの役割も演じない――ということは、まったく事実です。そして、ここではなおいろいろなことが、近年二十年間についてとくに歴史的にも、確かめられまた研究されねばなりません」（Briefe über „Das Kapital", S. 318, 岡崎訳、下巻、三七一ページ）。この「それ特有の恐慌」とは、マルクスが『資本論』第一部の貨幣論のなかで「特殊な種類の恐慌」たるところの「独立的に生じうる金融恐慌」といっているものである（インスティトゥート版、Bd. I, S. 143, Fußnote 99）。エンゲルスは右に掲げた記述のすぐ前のところで、一八四七年恐慌のさい、人々は恐慌を金融市場の破綻から説明して、この金融市場の破綻が周期的に生じる過剰生産のたんに「諸症候（Symptome）」にすぎないことを理解しなかった、こういった理解は事態を「顚倒的反映」のままにおいて見ているものである、ということを指摘しているのであって、それを受けて右の記述は、だがしかしまた一般的産業、商業恐慌の特殊的局面としての金融恐慌のほかに、独立的に生じる特有な金融恐慌もあることは事実だといっているのである。一八四七年恐慌のさいにも、一八四七年十月の金融パニック、イングランド銀行条例の停止というこの恐慌の「頂点」にいたる数ヵ月前、同年四月に金属国外流出から生じた金融パニックがそれであった（筆者稿「一八四七年恐慌」参照）。

しかし、右でエンゲルスが「ここではなおいろいろなことが、近年二十年間についてとくに歴史的にも、確かめられまた研究されねばなりません」といっているのは、こうした「独立的な金融恐慌」について研究する要がある――一寸見るとそうとられやすいが――、といっているのではない。「近年二十年間」はロンドン金融市場は混乱なく推移していたのであって、それ以前の時期に見られたような金融パニックはなんら生じなかったし、またエンゲルスがこの手紙を書いていた頃は、すでに前記ベーリング商会が「困難な状態」にあることがシティで一般に知られていたようであるが（J. Clapham : The Bank of England, vol. II, p. 327）、右はそういうことと関係があるのでもないであろう。ここでエンゲルスが「研究」の要があるとしているのは、「独立的な金融恐慌」についてというのではなく、金融市場がこのように独自的な運動をもつということについてであろうと思われる。エンゲルスは右についで、商業が生産にたいして独立化することを説いたのち、「このことは金融市場についても同じです。貨幣取扱業（Geldhandel）が商品取扱業（Warenhandel）から分離されるやいなや、それは一つの――生産および商品取扱業によって設けられた一定の諸条件のもとで、そしてこの限界の内部で――特有な発展をもち、それ特有の性質によって規定された特殊な諸法則と独特な諸局面とをもちます。これに加えて、貨幣取扱業がこうして一そう発展

して証券取扱業（Effektenhandel）にまで自己を拡大し、この証券が国債だけでなく、産業、交通の株式がこれに加わり、かくて貨幣取扱業が、生産――これは全体としては貨幣取扱業を支配する――の一部分にたいする直接的支配を獲得するようになると、貨幣取扱業が生産に及ぼす反作用は、一そう強くかつ一そう複雑になります」云々（a. a. O. S. 318—9, 岡崎訳、三七二ページ）、と述べているのであるが、こういった事柄について「近年二十年間についてとくに歴史的にも」「研究」する要がある（たとえば『資本論』のインスティトゥート版第三巻のはじめに挿入されている「『資本論』第三巻への補遺的覚書」―「取引所」（一八九五年）のような）、といっているものと読みとられるのである。つまり、エンゲルスが上でいっていることは、文字面では恐慌について記しているにはちがいないが、その内容は事実上、恐慌とはすくなくとも直接的にはかんれんがない――こうした「貨幣取扱業」の独立化、その発展が恐慌にとって演じる役割にははなはだ大なるものがあるとはいえ――のである。念のため。

まず、一八九二年三月八日付ベーベル宛の手紙。ここでエンゲルスはつぎのように述べている、――「失業者の件はたしかに来年はもっと悪くなるかもしれません。保護関税制度は自由貿易とまったく同じ結果をもった。すなわち個々の国民市場の過充、しかもほとんどいたるところにおいて、――ただ当地〔イギリス〕だけはまだ君たちのところ〔ドイツ〕ほどひどくはない。しかし当地でも――ここではわれわれは一八六七年以来二つないし三つの小さな緩慢な恐慌（zwei bis drei kleine schleichende Krisen）を切抜けてきた（überstanden）――、結局ふたたび急性な恐慌（eine akute Krise）が準備されているように見えます。最近二、三年の法外な棉花の収穫（年当り九百万バーレン以上に達する）は、一八四六年の恐慌の最悪の時期に匹敵するほど価格を圧迫し、[21] また同時に生産を圧迫し、だから、当地の製造業者が過剰生産せざるをえないのは、アメリカの栽培業者が過剰生産したからだ！　ということになります。そのさいかれらはたえず損をする。というのは、原料価格が下落するので、高価な棉花から紡いだかれらの製品は、市場に出るときはいつでもすでに減価しているからです。……その他の産業部門でも、当地ではとくに右よりよ

いというわけではなく、鉄道収入や工業製品の輸出は十五ヵ月前から明らかに減少しており、だから、当地でもつぎの冬にはやはりひどいことになるかもしれません。大陸の保護関税の国々での好転はほとんど期待できません。通商条約は多少の一時的救済をもたらすかもしれないが、一年もたつうちにはまた元どおりになってしまう。そして、もしつぎの冬、ふたたび同じ騒ぎがパリ、ベルリン、ウィーン、ローマ、マドリッドでより大規模にはじまり、そしてロンドンとニューヨークから同じ反響が返ってくるならば、事態はもっと重大となるかもしれません」（"Briefe über Das Kapital", S. 336, 岡崎訳、下巻、三九三―四ページ、傍点―三宅）

右で一八六七年以来「二つないし三つの小さな緩慢な恐慌を切抜けてきた」といっているのは、一八七三―五年、一八七八―九年、一八八二―六年あたりの事態を指しているのであろう。一八九〇年のベーリング・クライシスのの ち、一八九一年から九三年までの間、イギリスの工業生産は低下をつづけた。エンゲルスはこの低下のなかで記しているわけである。

（21）一八四六年のさいは逆に棉花が不作で原料価格が騰貴した。そして他方、市場の需要減退から製品の価格はむしろ下がり気味で、この両方から利潤が圧迫された。『資本論』第三部第一篇第六章第三節「一般的例証、一八六一―六五年の棉花恐慌」のはじめの「前史」参照、また筆者稿「一八四七年恐慌」註（12）参照。

つぎは右から約半年のちの一八九二年九月二十二日付ダニエルソン宛の手紙。「一時的な一経済段階としての資本制生産は内的矛盾にみちており、これらの矛盾は、資本制生産が発展するにしたがって発展し、かつ明瞭になります。それ自身の市場を創出すると同時にそれを破壊するというこの傾向も、この矛盾の一つです。もう一つの矛盾は、資本制生産が到達する『出口のない状態（безвыходное положение〔=ausweglosen Lage〕）』であって、それは、ロ

シアのように外国市場をもたない国では、公開の世界市場で多かれすくなかれ競争能力がある国々におけるよりも早く現われます。競争能力ある諸国の場合には、一見出口のない（without an apparent issue）この状態は、商業上の転換に、新市場の暴力的開拓に、その出口を見出します。しかしこの場合にも、袋小路（the cul-de-sac〔=Sackgasse〕）に直面します。イギリスをごらんなさい。その開拓によってイギリスの商業に繁栄の一時的回復をもたらすことができた最後の新市場はシナです。だからイギリス資本は、シナの鉄道建設を力説します。しかし、シナの鉄道は、シナの小農業と家内工業との全基礎の破壊を意味し、そしてシナの大工業がそれと平衡をとることもないでしょうから、数億の人々が生存不能の状態に置かれるでしょう。その結果は、前代未聞の大量移住でしょう。アメリカにもアジアにもヨーロッパにも、嫌われたシナ人が氾濫して、世界最低のシナ的生活水準を基礎として、アメリカ、オーストラリア、ヨーロッパの労働者と競争する、――そして、もし生産の体制がそのときまでにヨーロッパで変えられていないならば、それはそのとき変えられねばならないでしょう」（Briefe über „Das Kapital", S. 354–8, 岡崎訳、下巻、四一一―二ページ、〔　〕内―テキスト編集者、傍点―三宅）

さきにも一八八五年の論文のなかで資本制生産が「袋小路」にいたるとし、それが一八九二年七月の記述のなかに再録されていることを見たが、この一八九二年九月の手紙でも同じく「袋小路」という表現がとられている。まえにたとえば一八八六年十一月の『資本論』英語版への序言のなかで、イギリスの産業体制の運行は生産の、したがってまた市場の急速な拡大なしには不可能であるが、幾何級数的に増大する生産力にたいして市場の拡大は算術級数的にしか進まず、イギリスの産業体制の運行は「まったく止まりつつある」と述べていたが、さきの一八八五年の論文で「袋小路」にいたりつつあるといっていたさいも、これと同様に、こうした「不断の拡大」が不能となりつつあると

いう意味で用いられていた。だがいまここでは、資本制生産は行きづまりにいたり、これは世界市場であたらしい市場を開拓することなしには抜け出せないが、たとえば新市場シナに出口を見つけても、結局、ヨーロッパの労働者の生活水準を強く引下げることとなって、政治的危機を醸成するだろう、といったことを指して、進むに進めず、退くに退けず、いわばヂレンマに陥る、として用いられているようである。なお「袋小路」といっても「出口のない状態」といっても、もともと言葉としては同じようなことであろう。いずれにしてもこれらの諸記述を見ると、エンゲルスは、一国内だけにおいては資本制生産は経済的に行きつまる、ここからしかしすぐに崩壊というのではもちろんなく、「慢性的不況」が持続するとし、失業者の増大――政治的危機を展望し（一八八五年の論文で資本制生産は拡大を必要とし「そうでなければ死滅するほかない」といっている「死滅」も、たんに経済的要因で「死滅」するといっているのではないであろう）、またこの経済的行きづまりは世界市場で新市場を開拓することなしには抜け出せない、だがこの最後の新市場はシナだが、これは結局はねかえってヨーロッパの労働者の生活状態の悪化、失業――政治的危機となることを展望している、と見てよいであろう。ところでこの資本制生産が世界市場での新市場開拓なしには行きづまるという点であるが、この立論については、右に掲げた記述のはじめのところ、またさらに左の註（22）に掲げておく記述に窺われるような、エンゲルスの市場論がこれとかんれんしているものと見られるのであって、この点についてはいろいろ問題が存すると考えられる。[22]

（22）エンゲルスはこの一八九二年九月二十二日付ダニエルソン宛の手紙のなかで、上に掲げた記述の前のところでつぎのように述べている、――「あなたは、機械で生産される商品が家内工業の生産物にとって代わり、かくて、それなしには農民が生活しえないところの補助的な生産を破壊することを嘆いておられます。しかし、そのことは、資本制的大工業の絶対的に必然的な一結果であります。すなわち国内市場の創出であって、それはドイツでは、私の若い頃に私の眼の前で行われました。…

…／大工業の繊維製品と家内工業のそれとの合計は増加せず、同じままであり、また減少さえしているというあなたの計算は、まったく正しいばかりでなく、もしそれとちがった結果が出るならばその方がまちがっているでしょう。ロシアの製造工業が国内市場に局限されているかぎり、その生産物は国内消費を充たしうるだけです。しかるに、国内消費はただ緩慢にしか増加しえなく、しかも、私の見るところでは、現在のロシアの諸条件の下では減少すべきでさえもあるでしょう。／というのは、大工業が、それ自身の国内市場を創出するまさにその過程によってそれ自身の国内市場を破壊する、ということは大工業の必然的諸結果の一つだからです。大工業は、国内市場を、農民の家内工業の基礎を破壊することによって創出します。しかし、家内工業なしには農民は生活しえません。かれらは、農民としては、滅ぼされます。かれらの購買力は最小限まで引き下げられ、そして、かれらがプロレタリアとしてあたらしい生存諸条件に落着くまでは、かれらはあらたに出現した工場のためにきわめて貧弱な市場をしかなさないでしょう」（a. a. O. S. 353—4, 岡崎訳、四一〇—一ページ、傍点—三宅）。このあと、さきに掲げた記述がつづいている。

つぎは右から約五ヵ月のち、一八九三年二月二十四日付の同じくダニエルソン宛の手紙。「もしもわれわれが西方で、われわれ自身の経済的発展においてもっと迅速に前進していたならば、そしてわれわれが資本制的体制を二、三十年前にひっくり返しえていたならば、ロシアはおそらく、資本主義へのかれ自身の発展を中止する時間をもったことでしょう。だが不幸にしてわれわれのところでは事態はあまりにのろのろと進んでおり、そして、資本制的体制をその危機的（kritisch）な点に駆り立てるところの、資本制的体制の経済的諸結果は、われわれをめぐる種々の国において、やっと今日発展しはじめたところです。イギリスが急速にその工業的独占を失いつつある一方、フランスやドイツはイギリスの工業水準に近づいてきています。そしてアメリカはまさに、これらすべての国を、工業生産物にかんしても農業生産物にかんしても、世界市場から追い出そうとしています。すくなくとも相対的には自由な貿易政策がアメリカで採用されたことは、イギリスの工業独占の没落を確実に完成するでしょうし、また同時にドイツやフ

ランスの輸出をつぶしてしまうことでしょう。その場合には Krise〔ここでは経済的恐慌というよりも資本制体制にとっての危機というほどの意味で用いられていると見られるべきであろう〕が到来するにちがいない。それはあらゆる点からって、世紀の終りです（tout ce qu'il y a de plus *fin de siècle*）」（Die Briefe……an Danielson, herausgegeben von K. Mandelbaum, S. 67—8, 改造社全集版訳、第二十一巻、一九二ページ、〔 〕—三宅。したがってドイツ語訳、なお Briefe über „Das Kapital" にはこの日付の手紙は載っているがここの部分は収められていない）。

一〇

つぎに『資本論』第三部のなかでのエンゲルスの書入れについて二、三見てみよう。それが所在する篇の編集時期はほぼ推定することができるが、しかしその時期がただちにこれら書入れが書かれた時期を意味するともいいえないので、ここでは第三部へのエンゲルスの序言の日付をこれらの書入れの日付と見ておくこととする。「序言」の日付は一八九四年十月四日である。『資本論』第二部が刊行されたのは一八八五年であるが、この第二部でのエンゲルスの書入れのなかには本稿としてとり出すべき記述はない。なお農業恐慌にかんれんする第三部第六篇のなかでの書入れ（インスティトゥート版、Bd. III, S. 774—5）はさきに他の記述を見たところで註（11）として掲げておいた。

一つは、第三部第一篇第四章「利潤率に及ぼす回転の影響」のなかでのつぎの記述。——「交通の改善は、流通時間を短縮するための主要手段である。そしてこの点では最近五十年間に一つの革命がもたらされたのであって、これに比肩しうるのは、前世紀後半の産業革命だけである。陸上では砕石を敷いた道路が鉄道によって、海上では遅くて

不規則な帆船が迅速で規則正しい汽船航路によって、駆逐された。そして地球全体が電信線によって張り廻わされる。スエズ運河によってはじめて真に、東アジアとオーストラリアとへの汽船交通が開けた。東アジアへの商品輸送の流通時間は一八四七年にはまだすくなくとも十二ヵ月であったが、今日ではほとんど十二週間ばかりに短縮できるようになった。一八二五―一八五七年間の二つの大きな恐慌根源地（Krisenherde）たるアメリカとインドとは、交通手段のこの変革によってヨーロッパの工業諸国に七〇―九〇％ほど近づけられ、かくしてその爆発能力（Explosionsfähigkeit）の一大部分を失った。全世界貿易の回転時間も同じ程度に短縮されて、これに参与する資本の活動能力は二倍ないし三倍以上も増加された」（インスティトゥート版、Bd. III, S. 90―1, 長谷部訳、青木版一三一ページ、傍点―三宅）。

交通手段の変革によって、従来の二つの大きな「恐慌根源地」の遠隔性がなくなり、かくしてその「爆発能力」の一大部分を失った、という記述は注目さるべきものである。このことはマルクスがたとえばつぎのように述べていることとかんれんがある事柄である、――「労働の生産力、したがって大規模生産が発達するにつれて、㈠、諸市場が拡張されて、生産地から遠くなり、㈡、したがって信用が長期化せざるをえず、かくして、㈢、思惑的要素（das spekulative Element）がますます取引を支配するにちがいない、ということは明らかである」（インスティトゥート版、Bd. III, S. 525, 長谷部訳、青木版六八一―二ページ、傍点―三宅）。そしてマルクスはここで「大規模かつ遠隔市場向けの生産は、総生産物を商業の手にゆだねる」とし、だが商業それ自身が自己資本をもって国民生産物全体を買上げてふたたび売ることができるということはありえない、「だから、この場合には信用――すなわち量的には生産〔物〕の価値量増大につれて増大し、期間的には市場の距離増大につれて増大する信用――なしにはすまない」といっている。ここで「信用」といわれているのは直接には商業信用であるが、このように遠隔市場が、商業、思惑、信用、信用の長

期化といった恐慌にとっての諸モメントと緊密に結びついていることが、右のアメリカ、インドを「恐慌根源地」たらしめる上に大きく与っていたのであった。

また、エンゲルスは、マルクスが『資本論』第三部第五篇のなかで、一八四〇年代にイギリスの商人が東インド取引において行っていた手形操作、割引について『マンチェスター・ガーディアン』の記述を引用し掲げているところに、つぎのような書入れを挿んでいる。――「この思惑的な手続き(Schwindelprozedur)は、インドからのまたインドへの諸商品が希望峯を迂回しなければならなかったかぎり、依然としてさかんに行われた。それがスエズ運河を、しかも汽船で通過するようになって以来、仮空資本を製造するこの方法は、商品の長い旅行時間という基礎を奪われた。そして電信によって、インドの市況がイギリスの事業家に、イギリスの市況がインドの商人に、その日のうちにも知られるようになって以来、この方法はまったく不可能になった」(インスティトゥート版、Bd. III, S. 447―8, 長谷部訳、青木版五八三ページ、傍点―三宅)。なお、『資本論』第二部の「流通時間」のなかで、マルクスは外国貿易における手形期限について一八六六年の『ロンドン・エコノミスト』から引用しているが、エンゲルスはそこにも、「その後、スエズ運河がこれら一切のことをすっかり変えた」という書入れを入れている(インスティトゥート版、Bd. II, S. 251, 長谷部訳、青木版三二五ページ)。ちなみに、スエズ運河が開通したのは、一八六九年である。

つぎは、第三部第五篇第三十章「貨幣資本と現実資本I」のなかでのつぎの註記。――「私がすでに他の箇所で注意しているように[23]、この点で[24]、最近の大きな一般的恐慌以来、一つの転換(eine Wendung)が生じた。これまで十年ごとの循環をしていた週期的過程の急性的形態は、相対的に長くてはっきりしない不況と、相対的に短く弱々しい事業立直りとの交替(Abwechslung)――この交替は従来より慢性的で、よりだらだらとしており、かつ種々の工業国

に時を異にして生じる――にとって代わられたように見える。だが問題であるのは、おそらく循環期間の長さ（eine Ausdehnung der Dauer des Zyklus）の点だけであろう。世界貿易の幼年期たる一八一五―四七年には、ほぼ五年ごとの恐慌[25]が指摘される。一八四七年から一八六七年までは、循環は決定的に十年ごとである。われわれは、未曽有のはげしさをもつあらたな世界的崩壊（Weltkrach）の準備期にあるのであろうか？　そうらしいいくつかの点がある。最近の一八六七年の一般的恐慌以来、大きな諸変化が生じた。交通手段の巨大な拡張――大洋汽船、鉄道、電信、スエズ運河――は、世界市場をはじめて現実につくり出した（hat den Weltmarkt erst wirklich hergestellt）。これまで工業を独占していたイギリスのかたわらに、一連の競争的工業諸国が現われた。過剰なヨーロッパ資本の投下にとって世界の全地域で従来よりも無限に大きく多様な領域が開かれたので、資本がより広く配分され、局地的な過度投機がより克服されやすくなっている。およそこうしたことによって、旧来の大ていの恐慌根源地（Krisenherde）および恐慌形成の機会はとり除かれるか、または大いに弱められている。これと並んで、国内市場での競争はカルテルおよびトラストの前に退潮し、他方、外国市場での競争は保護関税――イギリス以外のすべての大工業国はこれを自国の周囲にはり廻している――によって制限されている。だがこの保護関税自身は、世界市場の支配を決定すべき最後の一般的工業戦の開戦準備にほかならない。かくして、旧来の恐慌の反復に抗争する諸要素はいずれも、はるかに強大な将来の恐慌の胚種をみずからのうちに宿している」（インスティトゥート版、Bd. III, S. 533―4, Fußnote, 長谷部訳、青木版六九三ページ、傍点―三宅）。

（23）この「すでに他の箇所で」というのは、さきに掲げておいたところの、『資本論』第一巻英語版への一八八六年十一月五日付のエンゲルスの「序言」を指しているものと思われる。

(24) このエンゲルスの書入れは、つぎのようなマルクスの文章のなかに附された註である。――「この産業循環は、最初の衝撃がひとたび与えられると、同じ循環が週期的に再生産されざるをえないというような具合のものである」(ここに註(8)として上の記述が書入れられている)。不況(Abspannung)の状態においては、生産が、前の循環で到達された規模、そしていまや技術的基礎がそれに適している規模、以下に低下する。繁栄期――週期の中央――には生産がこの基礎の上でさらに発展する。過剰生産および眩惑の時期には、生産は生産諸力を最高度に緊張させて、ついに生産過程の資本制的諸制限を突破させる」(インスティトゥート版、Bd. III, S. 533―4, 長谷部訳、青木版六九二―三ページ)。なお、ここでマルクスがいっていることについては後掲の第三巻五四六ページの記述を参照されたい。

(25) インスティトゥート版ではここに星印を附し、「あきらかに誤植。循環(Zyklen)とあるべきところ」という編集者註を附している。しかしエンゲルスは、これまでのところにくり返し見られたように、一八四七年恐慌までは中間恐慌があって五年ごとに恐慌となった、したがって循環は五年ごとであった、としているのであり、ここの前と後とには「循環」という語が使われているが、ここはほぼ五年ごとの「恐慌」でも一こうに差支えがないであろう。むしろ、それにつづいて、一八四七年からは循環は「決定的」に十年ごとであったといっていることを顧慮すると、それまではほぼ五年ごとに「恐慌」が見られたと云う方が適切であろうとも思われる。いずれにしても「あきらかに誤植」として訂正を求めるには及ばない、と思われる。

さきに『資本論』第一巻英語版への序言のところでは、「一八二五年から一八六七年までたえずくり返した十年ごとの……循環は、なるほど、もうおしまいとなったように見える、――ただし、ただわれわれを永続的、慢性的不況という絶望の沼地に入らせるために」(傍点―三宅)と記していたが、ここでは「相対的に長くてはっきりしない不況と、相対的に短く弱々しい事業立直りとの交替――この交替は従来より慢性的で、よりだらだらとしており、かつ種々の工業国に時を異にして生じる――(eine mehr chronische, länger gezogene, sich auf die verschiednen Industrieländer verschiedenzeitig verteilende Abwechslung von ralativ kurzer, matter Geshäftsbesserung mit relativ langem entscheidungslosem Druck)」というように、「相対的に短く弱々しい」にしてもともかく「事業立

直り」が来ること、それと「相対的に長くてはっきりしない不況」――したがって従来のような形態での恐慌の形をとらないところの――とがたがいに交替するというように述べられているわけである。なおこの両記述が書かれた時期の間には前記のように「一八八八―九〇年の好景気」が横たわっていた。ところで、右でエンゲルスは「未曽有のはげしさをもつあらたな世界的崩壊」、「はるかに強大な将来の恐慌」を予想していることについてであるが、さきにもたとえば一八八五年十一月の手紙のなかで「この長引いている慢性的な不況は、これまでかつて見たことのないような狂暴さと規模とをもった崩壊を準備しているにちがいありません」とか、また一八九二年三月の手紙でも「結局ふたたび急性な恐慌が準備されているように見えます」とか述べていたが、一応これと同じような意味でいわれているものと見受けられる。そして、この「世界的崩壊」の予想の根拠についてはここでも十分に説明されているとはいいがたい。だがまた、ここで「世界市場の支配を決定すべき最後の一般的工業戦」をその要因の一つに挙げていることは、さきのたとえば一八九三年二月の手紙で、世界市場での来るべき激烈な競争を予想し、「その場合には Krise が到来するにちがいない。それはあらゆる点からいって、世紀の終りです」と述べていたさいのように、右の「世界的崩壊」もただに経済的恐慌の意味でばかりでなく、より大きく資本制体制にとっての危機という意味を含めて、むしろ後者の方に重さを置いて、考えられていたのではなかろうかとも思われる。なお、ここでエンゲルスが、「急性的形態は……交替にとって代わられたように見える（scheint）」とか、「だが問題であるのは、おそらく循環期間の長さの点だけであろう（vielleicht）」とか、「われわれは……あらたな世界的崩壊の準備期にあるのであろう？（sollten wir uns in der……befinden?）そうらしいいくつかの点がある（Dahin scheint manches zu deuten）」といったように、確言することを避けた書き方を採っていることは、注意さるべきであろう。こうした書き方を採っ

ているのは、はっきり断定するにはなお事態の進展を見なくてはならぬ、と考えての上のことと思われる。[26]

(26) E・ベルンシュタインはエンゲルスのこの第三巻五三三—四ページの註記を——かれは総じてここに掲げた第三巻でのエンゲルスの書入れに多大の関心を寄せているが——「注目に値する」とし、エンゲルスは産業循環があらたに延長されたかどうか、また「未曽有のはげしさをもつあらたな世界的崩壊の準備期にある」かどうかという疑問を提出しているとして、そこでつぎのように述べている。——「この箇所執筆後経過した歳月はこの疑問を未決定のままに残している。未曽有のはげしさをもつ経済的な世界的崩壊の徴候も確認されないし、また介在する事業立直りをとくに短命なものと特徴づけることもできない」と(Eduard Bernstein: Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie, neue, verbesserte und ergänzte Ausgabe, zweite Auflage, Internationale Bibliothek, 1921, S, 113, ベルンシュタイン「恐慌と近代的経済の適応能力」、松井隆一訳編『マルクス恐慌理論』、昭和六年、叢文閣刊、一二七ページ)。ベルンシュタインのこの書——いわゆる修正主義の書——がはじめ出されたのは一八九九年であったが、これはその先年『ノイエ・ツァイト』誌上で「社会主義の諸問題(Probleme des Sozialismus)」と題して書かれた一連の論文をとりまとめ、もととしたものであった。つまり、右はもと『資本論』第三巻刊行後二、三年のちに書かれたものである。

なお、ついでに附言しておくと、ベルンシュタインは右につづいてつぎのように述べている、——「むしろここに第三の疑問——これは右に掲げた疑問のなかにすでに部分的には含まれているものであるが——がおきてくる。すなわち、世界市場の巨大な空間的拡張は、通信および運輸交通に必要な時間の異常な短縮と相まって、攪乱調整の可能性を増大させないかどうか、またヨーロッパの工業諸国の非常に増加した富は、近代的信用制度の弾力性および工業上のカルテルの出現と相まって、地方的なまたは個々的な攪乱が一般的事業状態へ反作用する力を減少させたのではないかどうか、そしてこれらの程度たるや、すくなくとも今後やや久しい間は、以前の形のような一般的事業恐慌は概しておこりそうにもないと看做されないかどうか、ということである」(a. a. O. S. 113—4, 前掲訳編、一二七ページ)。この問題提起は当時大きな反響を呼び、またローザ、カウツキーなどによって反撃をうけたものであった。ベルンシュタインはさらにまた、右新版刊行のさい——これの序言の日付は一九二〇年二月——、つぎのような「追記」を加えている、——「本書を出版して約一年のち、一九〇〇年の春に、一つの事業恐慌がおきた。……しかし上の章を読み返す人は、恐慌がもはや生じないであろうという『予言』をそのなかに見出

すことはできないであろう。私はただ、経済学者たちの旧い定式が描いてみせているようなそうした恐慌が再現することに疑いを挟んだまでである。そしてこの疑いは、一九〇〇年の恐慌によっても、その七年のち――一九〇七年――に生じた恐慌によっても、打消されなかった。この二つの恐慌はさして長く続かず、ともに約二年後には克服されてしまった。そして、旧い定式が予想していたように事業不振の時期が長びいて続く代わりに、ともに、四年ないし五年にわたるあたらしい事業繁栄がすぐそのあとにしたがった〔ベルンシュタインがこう記しているところをみると、かれが「旧い定式」といっているのは、産業循環の典型的な形として示された以前のものではなく、エンゲルスが上掲の註記で述べているような形のものを指しているように受けとられる―三宅〕。近代的産業の循環は、その相貌をまったく変えてしまった。世界戦争のおそろしい反作用の下において、恐慌問題がいかなる形をとるかということは、まだ確実にこれを予断することはできない。過剰生産による恐慌よりもはるかに大きな諸危険がいま存在しており、これこそドイツの経済生活を脅威し、生産の計画的な規制を死活の問題たらしめているものである」（a. a. O. S. 128 前掲訳編、一四九―五〇ページ）。本稿としては、エンゲルスの記述にかんれんしたものとして、ただ参考までに掲げておくにとどめるが、既述のように一八九〇年代の後半から、一八七〇年代以来の長年の沈滞を破ってあらたな昂揚がひきおこされてきた。カルテル、トラストなどの恐慌にたいする能力についてのベルンシュタインの判断は、事実上、こうした動きがその立論の背景になっていたと見ることができよう。

また、右で「世界市場をはじめて現実につくり出した」のは「一八六七年の一般的恐慌以来」であるといっているように読みとられる書き方がなされているが、これはさきに見た一八八三年五月の手紙でも『イギリスにおける労働者階級の状態』の序言でも、「一八四七年」以来、「世界市場が完全につくり出された」、「それまではただ素質上存在していたにすぎなかったところの世界市場を事実上つくり出した」と述べていることと事実上やや牴触するように思われる。「世界市場」が「つくり出された」というのを、どういう状態を指していうか、ということは一つの問題であるが、世界市場の状況が一八四七年恐慌の前後から、それがさらに一八六六―七年恐慌後、大きく変化したことについてはさきにもくり返し見たとおりである。「恐慌根源地（Krisenherde）」についてはさきの第三巻九〇―一ペー

ジの記述を参照されたい。また、カルテル、トラストについてはエンゲルスは第三巻一四二ページの註（一六）および四七八―九ページでも書入れをしている（長谷部訳、青木版一九四ページ、六二二―三ページ）。

また、右で「問題であるのは、おそらく循環期間の長さ〔この Ausdehnung は長谷部訳では「拡張」と訳されているが、拡張、延長というようにも読めないことはない〕の点だけであろう」と記していることについて。ベルンシュタインは前掲書のなかでこの点についてつぎのように述べている。――「長い間社会主義者の側では、産業循環の増大する短縮化が、増大する資本の集積――螺旋形での発展――の当然の結果として推論されていたが、一八九四年にフリードリッヒ・エンゲルスが、循環期間のあらたな延長、すなわち以前の推測とはまったく正反対のことが生じているのではないかという疑問を提起してみせたということ、この事実はすでに、これら恐慌が旧来の形態でくり返されるにちがいない、という抽象的推論にたいして警戒を与えているものである」（a. a. O. S. 125, 前掲訳編、一四五ページ、傍点―原文のもの）。当時の模様を語っているものとしてこれも参考までに。

このほか、『資本論』第三部のなかにはつぎのような記述も見受けられる。すなわち、第五篇第三十一章「貨幣資本と現実資本Ⅱ」のなかで、「現実資本、すなわち生産資本および商品資本の蓄積にたいしては、輸出入統計が一つの基準を与える。そして輸出入統計を見ればつねにつぎのことが示されている、――十年ごとの循環をなして運動するイギリス産業の発展期（一八一五―一八七〇年）には、いつでも、恐慌以前の最近の繁栄期の最高限度が、つぎに生じる繁栄期の最低限度として再現して、それから、さらにずっと高いあらたな最高限度に増大する」（インスティトゥート版、Bd. Ⅲ, S. 546, 長谷部訳、青木版七〇九ページ、傍点―三宅）として、一八二四年から一八六三年にいたる輸出額の動きを掲げて、右のことを例証しているが、そこに「――F・エンゲルス」としてつぎのような書入れがしるさ

れている。「このことはイギリスについては、自明のことながら、事実上の工業的独占の時期にだけ当てはまる。だがそれは、世界市場がまだ膨脹しているかぎりは、近代的大工業をもつ諸国の全体についても一般に当てはまる」（S. 546, 長谷部訳、青木版七一〇ページ）。

前の繁栄期の「最高限度」がつぎの繁栄期の「最低限度」となるということは、さきに見たように、前の循環で到達された生産規模、いまや技術的基礎がそれに適している規模の基礎上で生産が行われるということにもとづいているものである。したがって、エンゲルスのいうようにそれが「工業的独占」の時期にだけ当てはまるとするならば、「繁栄期」は到来せず慢性的な不況ということになる。また「世界市場がまだ膨脹しているかぎり」というとき、その膨脹にはいわゆる外延的な膨脹のほか内包的な膨脹もあるわけであるが、この点はエンゲルスの既掲の「新市場」についての見解、総じてその市場論に問題があるように思われる。なお、右の「十年ごとの循環をなして運動するイギリス産業の発展期（一八一五―一八七〇年）」と記されている「一八七〇年」は、この第三部の原稿をマルクスが執筆したとされている時期から見ても、またこの前後から見ても、エンゲルスの書加えであろう。あるいはこの句全部がエンゲルスによる書加えかもしれない。